

リルケ訳『マリアナ・アルコフオラードの手紙』——翻訳と解題

白坂彩乃
大川 勇

第一の手紙

わたしの恋心よ、おまえがいかに先のことを見通せなかったか、見てごらんなさい。かわいそうに、おまえは裏切られ、そしてわたしをまやかしの希望で裏切ったのです。おまえがとてもたくさんさんの幸せを当てにしていた情熱は、いまやおまえに死に等しい絶望しかもたらすことができません。この絶望はせいぜい、おまえみたいな愛が、恋人がいなくなったという苛酷な状況のなかでのみ抱きうるものであり、じじつ恋人の不在によって引き起こされるものなのです。そうでしょう？ あなたがこうして去っていったこと——その救いようなさを言い表すに足る言葉を、まだ苦しんでいるわたしはどんなに考えても見つけることができません。こうして去ってしまったことで、あなたはわたしに、あなたの目を見つめることを永遠に禁じようとしているのですか。その目のうちにわたしがたくさんさんの愛を見、その目のせいでわたしの心は揺れ動き、その目がわたしをよろこびで満たし、その目がわたしのすべてであり、その目がわたし

には終わりのない満足だった——そんなあなたの目を見つめることを。ああ、わたしの目といえば、生気を与えてくれるただ一つの光を失ってしまったのです。わたしの目には涙があるだけ。この目にできることといえば、ただ涙を流すことだけなのです。あなたがここからいなくなることが決まったと知ってからというもの、絶え間なく。あなたがいないなんてわたしには耐えられません。なのでどことなく死んでしまうことでしょう。でもわたしには、ある種の不幸への嗜好があるように思われるのです。その唯一の原因があなたである、そんな不幸への嗜好が。あなたを一目見た瞬間に、わたしの命はあなたのもものになりました。わたしはどうやってでも、喜んであなたに命を捧げたいのです。幾千度もわたしはあなたのために息を送り届けています。ため息はあなたをあらゆる場所で探しまわりますが、ついにわたしのものと戻ってくると、それらはすべてずっと耐え抜いてきた不安を裏書きするものだったのです。ため息は、わたしの悪い運命の告げる率直な声で——運命はわたしを心穏やかにさせるつもりはないのですね——繰り返しこう語りかけるのです。「やめなさい、やめなさい、不幸なマリアナよ、自分をいたずらに消耗させることは。やめなさい、恋人を探すことは。二度と会うことのないひと。おまえから逃げるために海を渡って行ってしまい、フランスで愉しみごとに耽つて、おまえの苦しみをひとときも思い出すことなく、自分からおまえを燃え上がらせておいて、いざおまえが燃え上がると、それに感謝することもできない男のことを」。でもだめなのです、わたしはこうもあなたのことを悪しざまに言う気になれません。わたしがあなたを弁護するのは、むしろただわたし自身のためなのです。あなたがわたしのことを忘れてしまったなどと想像したくありません。あらぬ疑いで自分を苦しめることがなくても、わたしはもう十分に不幸なのではないでしょうか。それに、君への愛を証だてるために見せてきた心遣いはもうすべて忘れてくれたなんて、どうしてそんなことをおっしゃるのでしょうか。わたしはあなたのお心遣いすべてに心を奪われていました。まだあなたの情熱の証をもらっていたときと同じ激しさでもうあなたを愛さないのであれば、わたしはたいへんな恩知らずになるで

しょう。あんなに甘美だった瞬間の思い出がこうしておぞましいものになってしまうなどということが、どうして起こりうるのでしょうか。そしてその思い出が、本来はそうではないのに、いまやわたしの心を暴君のごとく弄ぶことになかならないのは仕方がないことなのでしょう。ああ、あなたの最後の手紙は、わたしの心を奇妙な状態へと突き落としました。わたしの心はつきり感じられる動きをして——そうわたしには思われるのですが——あなたに会いに行くために体から離れようとしていたのです。わたしはこうした激しい心の動きに打ち負かされてしまい、三時間以上も完全に正気を失っていました。あなたのために命をとっておいてはいけない、だから命を落とさなければいけないはずなのに生きながらえてしまうのは嫌だと、わたしは抵抗しました。そんなわたしの意志に反して、結局わたしは再び光を見いだしたのです。愛するあまり死ぬのだと思うとわたしは得意になりましたが、それはともかく、あなたがいない苦痛で引き裂かれた心の眼差しにこれ以上曝されなくていいのは、わたしにとって望ましいことでした。この発作のあと、わたしはじつにさまざまな状態をぐぐりぬけねばなりませんでした。しかしあなたと会えないあいだ、どうして苦しみにいられるのでしょうか。わたしは不満を漏らすことなく苦しみ耐えています。その苦しみもあなたあつてのものなのです。ねえ、わたしがあんなにもやさしく愛してさしあげたのに、あなたはこんな仕打ちをするのですか。でもそんなこと、わたしにはどうだっていいんです。わたしは決めているのです、生涯をかけてあなたをお慕いすること。ほかの男のひとには目もくれないことを。そして断言しますが、あなたもわたし以外のだれも愛さないようにしたほうがいいですよ。わたしのように燃え立っていない情熱に、あなたは満足できるのでしょうか。もしかするとあなたはわたしよりもきれいな人を見つけることもありましょう（いつかあなたは、君はほんとうにきれいだねなんて言うてくれたことがあります）。でもけっして、けっしてあなたはこんなたくさんの愛をよそで見つけることにはないでしょう。これに比べたら、他のことはすべてどうでもよいのです。もう手紙に、むなしいことを書き散らさなくて

ださい。僕のことを覚えていておくれなどと、もう書いてこないでください。わたしはあなたを忘れることなくでできませんし、また帰ってきてしばらく一緒に過ごしてくださいという希望を抱かせてくれたことも忘れません。ああ、どうしてあなたは、わたしと生涯をともにしたいとお思にならないのでしょうか。もしこの呪わしい修道院の外に出ることができたなら、わたしはここポルトガルで、あなたの約束が果たされるのを待ちはしないでしょう。なにも顧みず、わたしのほうから行きます。世界中あなたを探して、あなたの後を追って、あなたを愛するのです。そんなことが可能だと自分を慰めるなんてこと、わたしはしません。束の間のよろこびがたしかに得られるとしても、希望など抱きません。もう痛みにたいする感覚しか持たないようにするつもりです。もちろん、兄の計らいでこうしてあなたに手紙を書くことが多少なりともよろこびをかき立てることや、そしてこのよろこびがいまの惨めな気分を一瞬だけ忘れさせてくれることは、認めざるをえないのですが。後生ですから、なぜあなたがわたしを口説き落とすことにあれほど熱心だったのか教えてください。いつかわたしのもとを去らねばならないとわかっていらしたのに。どうして、わたしを不幸にしようとして執心なされたのでしょうか。修道院にいたわたしを、どうしてそっとしておいてくださらなかったのでしょうか。わたしがあなただけに何かしましたか。でもお許しください、あなたをお咎めしているわけではありません。復讐しようと考えてることなどできません。わたしはただ、わたしの運命の苛酷さを告発しているだけなのです。運命はわたしたちを分かつかつことで、これまで恐れられてきたあらゆる災いを与えているように思われます。しかしわたしたちの心を分かつことなど、運命にはできないでしょう。運命よりも強い愛が生涯、二人の心を結びあわせたのですもの。もしわたしの人生に同情してくださいなら、たびたび手紙をくださいね。お心や近況を知らせる労を少しばかりとっていただくくらい資格がわたしにはあります。そしてなによりも、来てください。さようなら、わたしはこの便箋から離れたくありません。これはあなたのお手におさまるのですから。その幸せがわたしの身にももうすぐ起こることを待ち望んでいます。

ああ、理性を失ってしまったわたし。よくわかっていますよ、そんなことありえないってことくらい。さようなら、もうこれ以上は無理です。さようなら、わたしを愛して、ずっと。わたしをもっと多くの苦悩に耐えさせてくださいませ。

第二の手紙

あなたの少尉さんから今しがた、嵐のせいであなたはやむをえずアルガルヴェ王国〔ポルトガルの最南端にあった王国〕に上陸なさったと連絡をいただきました。あなたが多くの苦勞に耐えねばならなかったのではないかと心配しております。わたしはこの想像にひどく取り憑かれてしまって、自分自身の苦悩に思いを馳せることなどほとんどできないくらいです。あなたの身に起こることすべてについて、わたしよりも少尉さんのほうがより関心をお持ちだなどと、あなたはそう信じていらつしやるのでしょうか。どうして少尉さんのほうが、あなたから詳しく報告を受けていらつしやるのでしょうか。はつきり言います。どうしてあなたはわたしに何も書き送ってくださらなかったのかしら。

出発なさってからというもの、あなたがわたしに手紙を書く機会にもしも恵まれなかったのであれば、わたしは心底不幸です。でも、わたしがほんとうに不幸なのは、その機会があった場合です。それなのに、あなたは手紙を書いてくださらなかった。あなたはわたしに最低な仕打ちをしたのです。あなたは度を越して恩知らずです。でも、こうした行いがあなたに災いをもたらすのであれば、わたしは取り乱してしまうでしょう。わたしが何らかのかたちで復讐に乗り出すよりも、あなたの行いがまったくもお咎めなしのままにいるほうがましなのです。

あなたの様子から、もうわたしを愛していらつしやらないと信じこんでしまわないよう、わたしは抵抗しています。わたしは見境なく自分の情熱に身を任せてしまうとところが少なからずあるのです。あなたのいい加減さを嘆く理由を述

べたてるよりも。

もしあなたが、途中からすでに見せていた煮え切らない態度を知り合った初めから見せてくれたとしたら、わたしはどれほど動揺せずに済んだでしょうね。でも、あんなにも激しい思いをぶつけられたらだれが騙されずにいられましょうか。そこから誠実な印象を受けない人などいるでしょうか。愛するひとの誠実さを疑うまでになるには時間がかり、しかも大いに苦勞させられて初めてそうなるのです。

あなたがどうせ、ほんのわずかの弁解で十分だと思っていることくらい、手にとるようにわかります。しかし仮に弁解することなど考えていないとしても、あなたに向けられたわたしの愛は揺るぎなくあなたの味方をしています。わたしがあなたの罪を問うのも本当は、そのあとであなたのことを自分で弁護するのに喜びを覚えてしまうという、ただそれだけの理由からなのです。

あなたは、わたしが完全にあなたのものになるまでわたしを口説きましたね。あなたの炎はわたしを燃え上がらせました。あなたが寄せてくださったご好意はわたしを魅了し、あなたはついに愛の誓いをしてくださいました。それをどれほど信じていたか。自分自身の愛情の激しさがわたしを誤った道へと導いたのです。こんなふうに晴れやかで幸せなスタートを切ったものが、いまとなつては涙、ため息、救いのない死となっています。そこで助けとなるものを、わたしはなにも見いだすことができません。

あなたへの愛が思いがけない至福をもたらしてくれたことを、わたしは否定できません。でもいまや、それをわたしは奇妙この上ない苦痛であがなっているのです。あなたがわたしの心に引き起こした動揺のすべての瞬間において、あなたは途方もない存在となっています。あなたの愛情をわたしがかたくなに拒んでいたなら、あなたをもっと激しく燃え上がらせるために心配や嫉妬の種をまく術を心得ていたなら。わたしの控えめな振舞いのなかにわざとらしさがある

とあなたが気づくことができていたなら。あなたが向けてくださっていると前々からわかっていた自然な愛情に逆らつて、自分の全理性を押し立てる意志をわたしが最後のところで十分に持つていたなら（これが無駄な努力だったのは言うまでもないのですが）——もしそうだったのなら、わたしを厳しく罰したり、あなたがわたしに及ぼす力を思い知らせたりするのは適切なことかもしれません。しかしあなたは、愛していると言ってくれる前からすでに、わたしには愛するに値する人のように見えたのです。それにあなたは、大いなる情熱の証拠をわたしに見せてくれました。わたしは我を忘れて、何も考えずに愛のなかへと飛びこんでいました。

あなたはわたしのように盲目にはなりませんでしたね。いまの状態にわたしが陥ったことに、あなたはどのように耐えられたのでしょうか。本当はあなたの負担になるにちがいないわたしのあらゆる感情を、あなたはどうするおつもりだったのでしょうか。ずっとポルトガルにいるわけではないということ、あなたはきつとご存じだったのでしょうか。疑いなのになぜ、あなたはそこによってわたしを見つけ出して、こんな惨めな状態に突き落としたのでしょうか。疑いようもなく、あなたはこの国でわたしよりもずっときれいなひとを見つけ、そのひとから同じだけの満足を得ることだつてできたでしょう。あなたにとって大切なのは最も野卑なことだけなのではないでしょうか。彼女はあなたを貞節に愛したことでしよう、あなたがここにいるあいだは。あなたがいないという彼女の苦しみは、あとで時が癒してくれたでしょう。あなたは彼女のもとを去つてしまえたでしょう、そのことで不実にも残酷にもなることなく。しかし、あなたがわたしにしたことは、氣に入られようと心を碎く恋人というよりは、むしろ冷酷にだれかを追い回す暴君のすることのように思えるのです。

ああ、あなたのものであるわたしの心に、こんなひどいことをするのは何のため？ わたしはよくわかっていますよ。あなたを説得してわたしを思い切らせることは、わたしがあなたに熱をあげたのと同じくらい簡単だつてこと。

わたしのこの愛すべてをいったん脇に置くとしても、そしてなにか度外れた真似をすることなど思いつかなかったとしても、あなたがわたしのもとから去っていくために口にしたのとはまったく別の理由にだって、わたしは抗うことができたでしょう。どんな理由もわたしには不十分に思えたでしょう。わたしをあなたから引き離すことのできた理由など、およそ存在しないのです。それなのにあなたは、フランスに帰るために見つけてきた口実をいくつも並べ立てましたね。船が出るんだ。なぜそのまま行かせなかったのですか。家族が手紙で言ってきたんだ……家族からのありとあらゆる非難にわたしがどれほど耐えねばならなかったか、ご存じではないのでしょうか。名譽のために、君のもとを去らないといけないんだ。わたしが自分の名譽を氣にしたことがあったのでしょうか。国王の命令に従わざるをえないんだ。聞いた話がみな本当だとすると、王様はあなたのお仕えなどまったく必要としていませんでした。王様はお許しになったでしょうよ、あなたが帰らなかったとしても。

あなたとともに人生を送ることができたなら、どれほど幸せだったでしょう。しかし、この無慈悲な別れがわたしたちの定めとなった今となつては、わたしの方は不実な女にならずにすんだと喜ぶこともできません。たとえ世界が減んだとしても、わたしはそんな悪辣なことはしなかったと言いつづけるでしょう。あなたはほんとうにわたしの愛情を、わたしの心の奥底をご存じだったのでしょうか。わたしを捨てて今後二度と会わないと、ほんとうに心をお決めることができるのですか。わたしのことをもう考えられないという、逃れようのない苦痛に曝されても——なにか新たな情熱のためにわたしを犠牲にするためでしたら別ですけれど。

わかつています、わかつていますよ、わたしが狂ったようにあなたを愛していることは。それなのに、心に歯止めがきかないのを嘆くなんてこと、思いもよらないのです。わたしは自分の心に追い立てられることに慣れてしまっています。幾千もの責め苦のまっただ中であつた一つの幸福に出会うことがなければ、わたしは生きてゆくことができないで

しよう。その幸福とは、それでもあなたを愛しているということなのです。

しかしわたしは、それ以外のすべてにたいする憎しみや反感にたまらなく苛まれています。わたしの家族、友人たち、この修道院が、わたしには耐えがたいのです。どうしても目に入らざるをえないものすべて、逃れがたく付きまとってくる雑事すべてが、わたしを嫌悪感でいっぱいにします。わたしは自分の情熱に嫉妬しているのです。わたしもこの情熱のように、あなたと関係のないことは何もできないしそうする義務もないと思うことができるのに、と。そうなのです、人生の一瞬一瞬をすべてあなたのために使わないのなら、それはわたしにとって心残りなのです。

ああ、わたしの心で渦を巻いて溢れんばかりの愛と憎しみが消えてしまえば、わたしはどうすればよいのでしょうか。たえず心をかき乱すものを克服して、落ちていて我慢よく生きていくことができるようになるでしょうか。いいえ、そんな空虚さ、そんな何も感じない状態は、わたしにはなんの意味もないのです。

人はみな、わたしの変化に気づきました。わたしの気分には、わたしの振舞いに、わたしという人間全体に起こった変化に。尼僧院長は初めはそれに苦言を呈していましたが、最後には優しくしてくれました。わたしが尼僧院長に何と答えたか、正確に言うことはできません。洗いざらい告白したのだと思います。最も厳格な修道女たちでさえ、わたしの状態に同情してくれています。彼女たちはこの状態を見かねて、いくばくかの思いやりさえも示してくれます。時と場合を見計らって、わたしをいたわってくれます。どんな形であれ、わたしの愛に心を動かされない人などいないのです。ただあなただけが底抜けに無関心でいらつしやる。あなたはわたしに冷たい手紙をお書きです。中身ときたら同じことの繰り返し、しかも紙の半分は空白。この手紙を見た人は、あなたが死ぬほど退屈していて、さっさと書き上げてしまいたいとは思っていないのをありありと読みとるでしょうね。ここ数日、ドナ・ブリテスがわたしを部屋から連れ出そうとしていました。わたしに気晴らしさせようと考えて、彼女はわたしとバルコニーに出て歩こうとしました。

そこからはメルトラ〔ポルトガル南東部の都市〕の方向が見渡せます。わたしは連れ立って歩いていましたが、すぐにむごい記憶に襲われて、その後一日の残りをずっと泣いて過ごすことになりました。彼女はわたしを部屋へ連れ戻しました。わたしはベッドに体を投げ出し、いつかまた健康になる見込みなどほとんどないと、幾千度も考えました。わたしの心を軽くするために周りの人たちがやってくれることもすべて、わたしの苦しみを大きくするばかりです。まさに彼女たちが用いる慰めの手段それ自体のうちに、心を曇らせる新たな、しかも実際の体験に根ざした理由を見いだしてしまします。まさにそのバルコニーで、わたしはあなたが通り過ぎていくところを何度もお見かけしていたのです。あなたの身のこなしにすっかり心を奪われながら。そしてわたしは、あの決定的な日にもこのバルコニーにいたのです。そう、わたしの不幸な恋がはじめて動きだしたのを知ったあの日。わたしのことをご存じないのに、あなたはわたしに氣に入られようとしているような気がしたのでした。みなの中からあなたはわたしを見つけてくださると、そう自分に言い聞かせました。あなたが馬の歩みを止めたとき、あらぬことを考えました。あなたのことをほかの人よりもよく見ていれば、そしてあなたが馬に拍車をかけるその熟達した動きに感じ入れば、あなたが喜んでくれるのではないかと。あなたが馬に難所を越えさせたとき、わたしはぞくつとしました。有り体にいえば、わたしはじつはあなたの行動すべてにすでに引きこまれていました。あなたはわたしに無関心ではないと感じました。あなたのやることなすことすべてを、わたしは固唾をのんで待ちうけていました。

こうして始まった恋がその後どうなったか、あなたは十分すぎるほどご存じですね。はばかりする必要はないとはいえ、この続きは書かないほうがよいでしょう。さもないとあなたの罪は、そんなことがありうるとすれば、あなたが実際にしたことよりも大きくなってしまうです。そしてわたしは、あなたに貞節を守らせようとしていかに無駄なことばかりしてきたか、自分を責めねばならないでしょう。あなたはこれから貞節を守ろうとはしないでしょうね。恩知らずな

あなたのもとでは、わたしの愛と献身でさえ望みを叶えることができなかったのに、こんな手紙と非難に何をどう期待すればよいのでしょうか。

わたしはだれが見ても不幸な女です。あなたの不当な仕打ちは、本当は不幸ではないのではないかと疑うわずかな理由さえ与えてくれません。あなたがわたしのもとを去ってしまった以上、わたしは何が起ころうと覚悟をしておかなければならないのです。

もしかして、あなたに魅了されたのはわたしだけでしょうか。ほかの人たちもあなたを見て好ましく感じることはないのでしょいか。ほかの女たちもあなたのことを愛してしまうことで、わたしが想いを寄せるのも無理はないと思ってもらえるなら、ありがたいどころではありませんでしょう。すべてのフランスの女たちがあなたを魅力的だと思ってくれたらいいのに。でも、だれもあなたを愛さず、あなたにもだれのことも好きにならないでいてほしいのです。馬鹿げたことだし、ありえないことです。それでも、わたしは十分知っています。あなたは大きな愛情を抱ける人ではないということを。そつと背中を押してくれる人がいなくても、新たな恋人が現れなくても、あなたはわたしのことを忘れてしまえるということを。しまいにわたしは思うでしょう、あなたになんらかの筋の通った言い分がありますように、と……。もちろんわたしはそれを聞くともつと不幸になるでしょうが、そうするとあなたはそれほど多くの罪を背負わずともよくなるでしょう。

あなたがフランスで、まったく制限のない自由のもとでもたいしたよろこびを味わうことなく暮らしているさまを、わたしは見えてとることができます。長旅のあとの疲れが、すこしの愉しみが、わたしのあふれる感情に応答できていないことへの気がかりが、あなたを捕まえて放しません。でも、わたしのことはどうかお気遣いなく……。わたしはあなたと時折お会いして、ただわたしたちが同じ場所にいることを知りさえすれば満足するのです。でも、もしかするとわ

たしは勘違いをしているのかもしれませんが。ほかの女がきびしく冷たい振舞いをするほうが、わたしが何でもお認めするよりも、あなたの心をつかむのでしょうか。ひどい扱いを受けるほうがあなたには魅力的だなんて、そんなことありうるでしょうか。

しかし、あなたが大きいなる情熱にのめりこんでしまいう前に、それが何であるか考えてください。しっかりとその目で見てください、いかに限らない苦しみをわたしが味わっているかを、途方に暮れたわたしの状態を、不安定なわたしの気分を、矛盾ばかりのわたしの手紙を、わたしの親密な態度を、わたしの絶望を、わたしの要求を、わたしの嫉妬を……。ああ、あなたはご自身を不幸にするでしょう。どれだけお願いしても十分ではありませんが、わたしの置かれた状態から学んでください。あなたのために耐え忍んでいるわたしの姿はすべて、少なくとも何らかの形で今後のあなたの役に立つはずです。五、六か月前のことでしょうか、あなたはわたしに決まり悪そうに告白なさいました。きわめて率直に、故郷に愛するひとがいるんだと打ち明けられましたね。あなたをそこに引きとめているのが彼女なら、遠慮なく言ってください。わたしがあなたへの思いで身を焦がすのをやめられるように。

一縷の望みがわたしをなおも支えています。でもその望みが向かう先に何もないのなら、いまここで望みなど捨ててしまったほうがいいのです。望みごと、わたし自身を捨ててしまったほうが。その女を描いた絵と彼女からの手紙を何通か送ってくださいませ。彼女があなたに言ってきたことをすべて教えてください。もしかするとわたしは、自分を慰める理由を見いだせるかもしれませんが。いえ、それがわたしをさらに慰めない状態へと突き落とすことだってあるのです。

これ以上こんな状態に耐えることなどわたしには無理です。どんな些細な変化でもわたしにとっては救いとなるでしょう。あなたのお兄様や義理のお姉様を描いた絵も見たいです。あなたにとって少しでも意味のあるものなら、どれ

もわたしには限りなく貴重なものなのです。あなたを取り巻く状況にわたしは完全に取りこまれてしまつて、自分の自由はかけらも残されていませんでした……。時折、わたしがあなたに屈服しすぎるあまり、あなたいま愛している女にかしづくことさえできてしまいそうな気がします。あなたにひどい扱いを受け、軽んじられて、すっかり打ちひしがれていますので、嫉妬してもあなたに拒絶されることはないと思つて、頭の中だけで想像してみることすらできないほどのす。そうなのです、あなたを非難すると、非難する自分が悪いのだと心底感じてしまいます。あなたが受け入れてくれない感情を、狂つたように何度も何度もぶつけてはいけなく強く思うこともよくあります。

将校さんがそこにいて、もう長いことわたしの手紙を書き終えるのを待つてくれています。あなたの気分を害さないような手紙を書くと思つてはいたのです。見てのとりのひねくれた手紙になつてしまいましたが、もう終わりにします。ああ、終わらせることができたらしいのに。手紙を書きながら、あなたに話しかけているような気がします。あなただけのことをほんの少しだけでも近くに感じています。この手紙を読んだあとでは、次の手紙はたいして長くもなければ、そう不愉快でもないでしょう。安心してその手紙を開封し、読んでいただけると約束します。もちろん、あなたが受け入れてくれない愛の話をいつたいてすることがあります。そんなことはもういたしません。

あと数日で、わたしは前後の見境なくあなたに身も心も捧げきつてから一年になります。あなたのお気持ちはたいへん強くまつすぐだという印象をわたしは受けました。それがこんなことになるなんて、想像すらしませんでした。わたしが言いなりになつたばかりに、ただわたしから離れるために五百マイルも逃げ、難破の危険に身をさらさなければいけないほどあなたに嫌われるなんて。だからであれ、わたしはこんな仕打ちを受けるいわれはありませんわ。思い出してもごらんなさい、わたしはどれだけおどおどして、内気で、気が動転していたか。でも、そんなわたしを愛すると誓わせたものが何だったか、思い出さないようにご用心されたほうがよろしいでしょう。そうしたいかどうか

は、あなたがお決めることです。

あなたにこの手紙を届けてくださる将校さんが、もう行かなければと、これで四度目の催促をなさっています。なんでお急ぎなのでしょう。彼はきつとここで哀れな娘をお見捨てになるのですわ。さようなら。この手紙を終わらせることは、わたしにとっては身を切るようなことです。わたしのもとから、もしかすると永遠に去ってしまったときにあなたが味わった苦痛などとは比べ物にならないくらいです。さようなら。あなたを幾千度もいい名前と呼んだり、自分を抑えられずに衝動に身を任せてしまったりはしません。わたしは自分が考えることのできる幾千倍も、あなたのことを愛しています。あなたはわたしにとってなんてかけがえない存在でしょう、それなのにわたしにたいしてなんて非情なのでしょう。あなたは手紙を書いてくれません。おわかりでしょう、もう一度言わずにはいられなかったのです。またこんなこと言いはじめたら、将校さんはそのあいだに行ってしまうでしょうね。でも、それが何だっていうの。行くなら行ってしまいなさい。わたしはあなたのためではなく、わたし自身のために書いているのですから。わたしは自分の心を軽くしなければいけませんわ。この手紙がどれだけ長いかご覧になって、あなたは不安になるでしょう。そして読んでくださらないでしょう。わたしはいったい何をしかして、こんなに不幸になってしまったのでしょうか。どうしてあなたはわたしの人生に毒を盛ったの。わたしがまったく別の場所に生まれていたらよかったのに。さようなら、お許しください。わたしを愛して、なんてもうお願いできません。ほら、わたしはこんなになってしまいました……。さようなら。

第三の手紙

わたしにどんな女になれというのでしょうか。わたしにどうしてほしいと、あなたはお望みでしょうか。あのころ予想していたすべてのことから、わたしはなんとかけ離れたところにいることでしょうか。あなたが帰ってこられるときは、すべての町から手紙を書き送ってください。あなたはかなり長い手紙をくださる。また会えるという期待を胸に、わたしは情熱を燃やしてられる。あなたが貞節を守っていると完全に信じて落ち着いた態度でいられる。そのため少なくとも耐えられないほどの状態になることはなく、過度の苦痛は感じずにいられる——わたしはそんなふうに思っていたのです。わたしはあのころから遠く離れたところに来てしまいました。それどころか、もしもいつの日かあなたがわたしのことを完全に忘れてしまったと確信したら、その苦しみから逃れるためにどうやって力を振り絞れるかとふと考えてしまうところまで。あなたがいらつしやらないこと、日々のお勤めに敬虔に心を奪われる一瞬一瞬、夜更かしと気苦労のあまりわずかに残された健康さえも失ってしまうのではないかとという恐怖、あなたが戻ってくる見込みがごくわずかしかないこと、あなたの態度と別離の素っ気なさ、たいそうお粗末な言い訳を並べ立てざるをえなかったご出立——こうしたことすべてが、そしてまた幾千ものその他の理由も、いざというときにはわたしを苦悩から解放するために手を貸そうと約束してくれるように思われました。最後に闘わなければいけなかったのは自分自身だけでした。しかしわたしは自分がどれほど弱いかわかっていませんでした。いま味わっている苦しみのすべてを予想することなどできなかったのです。

ああ、わたしは言葉では言い表せないほど嘆かわしい境遇です。自分の苦しみをあなたと分かち合うこともできずに、不幸のなかに一人ぼっちでいなければいけないのですから。この考えはわたしを死に迫いやります。わたしたちが二人

で悦びにひたっていたときもあなたは心ここにあらずだったと考えると、驚愕のあまり死んでしまいそうです。ええ、今では、これまでのあなたの振舞いがいかに嘘偽りばかりだったかわかっているのです。君と二人きりでいるとこの上なく幸せだよとおっしゃったそばから、あなたはわたしを裏切りました。あなたがわたしに興味をもち情熱を燃やしたのは、ただわたしが夢中になってすがりついたから。血も涙もないやり口で、あなたはわたしの心に火をつける計画を立てられたのです。わたしの恋心を、かち得た勝利としか思っていられなかつたのです。あなたの心は、本当はこうしたことすべてに何の関心を持っていなかったのです。……こういうことは、あなたにしてみれば不幸ではないのでしょうか。わたしの献身からこんなつまらない快樂しか引き出すつもりがないのなら、あなたはほんのわずかの思いやりも持つ必要はないのでしょうか。それに、こんなに愛しているのにあなたを丸ごと幸せにすることができないなんて、どうしてそんなことがありえるのでしょうか。わたしは（あなたのために、ただただあなたのために）泣いています、あなたが本来手に入れるはずだった無限のよろこびのことを思って。きつとあなたは、そのよろこびを味わおうともしなかつたにちがいありません。あなたがそんなよろこびを知っていたら、それはわたしを誘惑したよろこびよりも豊かなものだと、間違ひなくお認めになるでしょう。愛されるよりも自分で激しく愛するほうがはるかに幸せですし、自分の心を熱く揺さぶるものを感じることもできる——そんな体験をあなたはなさることができたはずです。

わたしがいまどうなっていて、何を望んでいるのか、わたしにはもうわかりません。わたしは幾千もの相矛盾した苦しみに引き裂かれています。こんな悲惨な状態を思い浮かべることができません。わたしはたとえようのないほどあなたを愛しています。あなたをあまりにも大切に思っています。だから、あなたもわたしと同じ狂気に振り回されてくればいいのになどと、本気で望んだりできません……。もしあなたがそうなったら、わたしは自殺するでしょう。あるいは、わざわざ自殺なんかしなくても、苦痛のあまり死んでしまうでしょう。もしもあなたが、けっして心休まる

ことがない、あなたの人生はいつときの高ぶりとそれが消えたあとの錯乱の繰り返しではない、あなたはとめどなく泣きつづけこの世のすべてが忌まわしい——そんな状態にあると知ってしまったら。自分自身の苦悩と闘う力なんて、わたしにはほとんど残されていません。あなたの苦悩がさらにわたしを悩ませるなら、なおのことわたしはどう耐えればよいのでしょうか。あなたの苦しみを思うほうが、自分の苦しみの相手をするよりも幾千倍も心の痛むことなのですから。

ですがわたしは、もうわたしのことを思い出さないでくださいと言う決心もつきかねているのです。正直に申し上げますと、わたしは狂おしいほど嫉妬しています。あなたがお愉しみになることすべてに。フランスで見つけられた、あなたの好みに合うものすべてに。

わたしは自分でも、なぜあなたに手紙を書いているのかわからないのです。よくよくわかっていますが、あなたはわたしにせいぜい同情の気持ちしか抱かないでしょう。わたしはあなたに同情などしてほしくありません……。あなたのためにすべてをどれほど犠牲にしたかを考えると、自分自身に腹が立ってきます。わたしは体面を汚しましたし、家族には激怒されました。修道女にたいするこの国の法の厳しさを身をもって知りました。そして最後には、恩知らずなあなたに手のひらを返されたのです。これが、わたしが味わったすべての不幸のなかで最もこたえるものであったように思います。

にもかかわらず、はつきりと感じます。わたしの良心の呵責が、まったくもって心からのものであるわけではないことを。わたしはあなたへの心からの愛ゆえに、もっと大きな危険と渡りあえばよかったと。わたしの人生と名誉を賭けたことは、わたしにとっては不幸なよろこびなのですから。わたしは、自分が持っているこの上なく大切なものをすべてあなたに差し出さなければならなかったのではないのでしょうか。結局のところ（わたしがやったように）大切なもの

をつぎこんだことに、完全に満足すべきだったのではないのでしょうか。わたしはいつも自分の苦悩にも、あふれる愛にも、たいして満足していないように思います。かといって、残念ながらあなたに満足することもないのですが。わたしは生きながらえているのです。不実なわたし。わたしは人生をめちやくちやにするようなことをたくさんしていますが、その一方で生きるために必要なことも同じくらいしてしまっているのです。恥ずかしくて死んでしまいそうです。つまり、わたしの絶望は手紙のなかだけのことなのです。幾千度お誓いしたとおりにあなたを愛しているのなら、わたしはとっくに死んでいなければ shouldn't でしょう？ わたしはあなたを騙していたのです。次はあなたが不満を訴える番ですよ。ああ、あなたはもうどうしてそうしないのでしょうか。わたしはあなたが去っていくのを黙って見ていました。あなたがいつか帰ってきてくださるという希望は、わたしにはもう残されていません。なのにわたしはまだ生きているのです。わたしはあなたを騙してしまいました、許してください。でも、あなたは一步も譲ってはいけません。わたしをひどく扱ってください。わたしの恋心が強くなかないことに気づいてください。この程度の恋心に満足しないでください。僕への愛のために死んでくれとおっしゃってください。お願いですから、そうやってわたしを助けてください。わたしが女という性の弱さを克服し、この優柔不断な行動すべてを真の絶望のなかで終わらせられるように。

わたしが悲劇的な最期を迎えたら、さすがのあなたも折にふれてわたしのことを考えてくれるようになるでしょうね。わたしとの思い出はあなたにとって大切なものになるでしょう。悲劇的な死という異常な出来事ならば、もしかするとあなたの心を揺さぶれるかもしれません。そして死は実際、あなたがわたしを突き落とした境遇よりもましなのではないでしょうか。さようなら。あなたになんか会わなければよかった。ああ、また偽りの気持ちを書いてしまいました。わたしはこう書きながら、あなたに会えなかった自分よりも、あなたへの愛ゆえに惨めな女になった自分のほうがいいと思っていることを、よくよくわかつているのです。

だからわたしは文句は言いませんし、自分のひどい運命にも納得しています。あなたがこの運命をよりよいものにしようと望まなかったのですから。さようなら。わたしが深い悲しみのうちに死んでしまったら、心をこめてわたしを悼んでくださると約束してください。少なくとも、わたしの愛の切実さを思つて、他のどんな女にも欲望や愛情を抱かないと約束してください。それはわたしにとって十分な慰めとなるでしょう。あなたを永遠に諦めなければいけない以上は、せめてあなたを他の誰のものにもしたくないのです。でも結局は、あなたは残酷な人なのでしょうか。わたしの絶望をいいことに、別の女の前でもっと愛想よく振舞つたり、自分はかつて世界で一番の愛を注ぐことができたといひけらかしたりするような。もう一度、さようなら。これまであなたに書いた手紙はどれも長すぎましたね。わたしはあなたを十分に思いやることができませんでした。お許しくださいませ。分別を失つた哀れな娘にたいして、あなたが多少なりとも目をつぶってくださいることを望みます。ご存じのように、この哀れな娘も、あなたと出会う前まではまともだったのです。さようなら。わたしは自分が置かれている耐えがたい状態のことばかり話していると思います。ですが、わたしは心の底から、あなたが与えてくれた絶望に感謝しているのです。あなたと知り合う前に自分が生きていた平穏な日々にたいしては、嫌悪感はありません。さようなら。一瞬ごとにわたしの愛は大きくなっていきます。あなたに言いたいことが、まだどれほどたくさんあるでしょう……。

第四の手紙

自分の胸のうちの思いをあなたに書いて伝えていると、自分がその思いにたいして最低なことをしていると感じてしまいます。あなたご自身も強い思いを自分の胸の内に持っていてわたしの思いを察してくださいるのですしたら、どれほど

幸せでしょう。でも、こんなあなたを当てにすることできません。正直に申し上げます（わたしが感じているほど激しくそれを口にすることはできないのですが）。あなたがいまなさっているように、わたしのことを忘れるという虐待じみたことはしないほうがよいですよ。そのためにわたしは絶望に突き落とされ、あなたご自身にとっても不名誉なことになるのですから。あなたがわたしのもとを去ろうと決心なさったのがわかったときに予見できた不幸を、好きなだけあなたの前で嘆かせてもらえると期待する権利くらい、少なくともわたしにはあります。今ならはつきりわかるのですが、あなたがわたしにたいして、そういうとき普通そうする以上に誠実に接してくださると思っていたとき、わたしは思いちがいをしていました。愛しすぎて、どうやらわたしは何も疑えなくなつたようで、最後にはその愛は並の貞節では応えきれないものにもなりました。それなのに、あなたはそんなわたしを裏切つてしまつた方なので、最終的に、わたしがあなたにして差し上げたすべてのことに正當に報いるよりも、不実が勝ることになります。あなたがわたしを愛した理由が、わたしがあなたを愛しているということではないのなら、わたしはあまりにも不幸でしょう。すべてがあなたの愛情から出てきたことであつてほしいと思います。しかし、そんな心境からもわたしはいまや遠く離れています。六か月ものあいだ、一通の手紙ももらっていないのですから。この不幸はすべて、わたしがあなたへの恋心に浮かれて盲目になつていたせいに違いありません。味わつていた愉しみのほうがわたしの愛よりも早く終わつてしまふことを見越しておかねばならなかつたのではないでしょう。あなたがわたしのことだけを思つて残りの人生をポルトガルで過ごし、自分の故国と軍人としての経歴を放棄するなんてこと、でもわたしに想像できたでしょうか。わたしの苦悩を軽くしてくれるものはありません。幸福だったときの記憶が、わたしの絶望をますます完全なものにするのです。わたしが感じていた恋い焦がれる気持ちはずべて、本當にむなしかつたのでしょうか！ もう以前のように、あなたがわたしの部屋で心と体を燃え立たせ、恍惚としている姿を見ることはないのでしょうか。ああ、ああ、いつもこ

の話になってしまいますね。ですがわたしにはよくよくわかっています、わたしの心を夢中にさせたあなたの激しさは総じて、ほんの少しの快楽だけで燃え上がっては、快楽が終わればそれと同時に終わってしまうものであったことが。このあまりの至福の瞬間に、わたしは自分の理性に呼びかけることができなければならなかったのでしょう。あふれ出る悲しい悦楽に歯止めをかけ、いずれ訪れる苦しみを今から少しでも予想させてくれるように、と。しかしわたしはあなたの前に身を投げ出しました、すべてを捨てて。悦びを萎えさせるものや、あなたの情熱の燃え立つ証を味わい尽くそうとするわたしの邪魔をするものがあるかもしれないとは想像もできませんでした。あなたと一緒にいられることの幸せで、頭のなかはいっぱいでした。あなたがいつかわたしのもとからいなくなってしまうなんて、考えられませんでした。にもかかわらず、わたしは覚えています。時折あなたに、あなたはきつとわたしを不幸に突き落とすでしょうと言っていたことを。しかしこの不安はすぐに消え去りました。わたしはなおのこと享樂的に、不安をあなたのために押し殺し、あなたの魅力と嘘偽りの約束に身をゆだねました。この苦惱すべてをどうにかする手立てを、わたしはよく知っています。もうあなたを愛さないなら、その瞬間、苦惱から解放されるでしょう。それにしても、なんという手段でしょうか！ 嫌です、あなたを忘れるくらいなら、もっとこの苦惱に耐えていくほうがよいのです。ああ、どうするのわたし次第なのでしょう。もうあなたを愛したくないとほんの一瞬でも願ってしまったことで、自分を責めることはできません。嘆かわしいのは、わたしよりもあなたです。といいますのも、フランスの愛人から与えられる薄っぺらな愉悅に浸っているあなたよりも、いま味わっているような苦しさを味わい尽くそうとしているわたしのほうがずっとよいからです。無関心でいられるあなたを羨んだりはしません。あなたはかわいそうなお方です。ですが、あなたが完全にわたしのことを忘れられるかどうか、確かめてみたいものですわ。わたしがいないと生半可な快樂しか得ることができないというところまであなたを変えたのは、わたしの誇りです。そして、わたしはあなたよりも幸せなのです。

あなたよりもはるかにたくさん、頭を悩ませているのですから。

わたしはあれから修道院の門番に任命されました。わたしに話しかけてくる人はみな、わたしのことを気が狂っていると思っています。そんな人たちにわたしは、なんと答えてよいかわかりません。修道女たちも、わたし自身と同じくらい分別を失っているに違いありません。いまだに、何かを見張ることがこのわたしに可能だと思っていらいっしやるからです。マノエルとフランシスコ（シャミリーのポルトガル人の従僕）、この幸せな子たちが羨ましくてたまりません。どうしてわたしは彼らのように、いつもあなたのそばにいられないのでしょうか。あなたに付いていけばよかった。そして本当に、彼らよりもかいがいしくあなたにお仕えすることは、わたしの真心からすればたやすいことだったでしょう。

あなたに会うということ以外、この世で望むものはありません。わたしをお忘れになることだけはしないでください。あなたがわたしのことを覚えていらつしやるということだけで満足するつもりですが、その確信がないのです。毎日会っていたあの頃は、あなたに少しでもいいから覚えていてほしいというのはまったくちがったことを望んでいました。ですがあなたは、あなたの意志に屈服するようにわたしを誘惑したのです。いえ、それでも、わたしはあなたを崇拜していたことを後悔していません。あなたがやって来てわたしを誘惑したことは、喜ばしいことなのです。あなたが冷酷にも、もしかすると永遠にわたしのもとから去ってしまったことで、あなたにのぼせ上がつたわたしの愛には傷ひとつ付かないでしょう。このことをわたしは周りの人たちに知ってほしいし、秘密にもしません。あなたのために、そして道徳や礼節と呼ばれているものすべてに逆らって、わたしがやったことすべてをやり遂げたことに恍惚としています。わたしの名誉、そしてわたしの信仰心は、この恋がはじまってしまった以上、いまやあなたをこの上なく愛することにはしかなのです。

わたしに手紙を書かなければとあなたに思わせたいために、こんなことを言っているではありません。どうかご無

理なさらないでください。わたしは、あなたの本心から自然と湧き上がってくるものしか望んでいません。黙って自分の内にとどめておける程度の愛の証など、何であれわたしはいりません。無理して手紙など書きたくないとおっしゃるのなら、そんなあなたを許してあげることにわたしは喜びを見いだすでしょう。わたしはあなたにたいしては何でも許してしまいます。どこまでも、とめどなく。

フランス人の将校さんが同情して、今日は三時間あなたのことを話してくれました。フランスはスペインと講和を結んだ（一六六八年のアーヘンの和約）、と彼は言っていました。本当にそうなら、こちらへいらして、わたしをフランスへ連れていくことができるのではないのでしょうか。ですが、わたしはそんなことをしてもらうに値しません。したいようにしてください。わたしの愛は、もはやあなたがわたしをどう扱うかに左右されたりしないのです。

あなたが行ってしまつてからというものの、わたしが健やかだったときは一瞬たりともありません。一日に幾千度もあなたの名前を唱えること以外に、慰めとなるものは何ひとつありません。修道女のなかには、あなたに突き落とされたこの嘆かわしい境遇を知っている人も何人かいて、よくわたしの部屋にやつて来ては、あなたの話をしてくれます。わたしはできるかぎり自分の部屋にいます。あなたがあれほど何度も来てくれた部屋ですから。わたしはいつもあなたを描いた絵の前にいます。この絵はわたしの命よりも幾千倍も大切なものなのです。絵を見つめると、少しだけ幸せな気分になります。しかし、もしかするとあなたとはもう会えないかもしれないと思うと、途方もない悲しみに襲われるのです。いったいどうして、あなたにもう二度と会えないなどということがありえるのでしょうか。あなたは永遠にわたしのもとから去つてしまったのですか。わたしは絶望しています……。あなたの哀れなマリアナは、もう何もできません。手紙はここまでにします。意識が遠のいていくのを感じます。さようなら、さようなら。わたしを憐れんでくださいませ。

第五の、そして最後の手紙

あなたに手紙を書くのはこれが最後です……。わたしの言葉づかいの変化やこの手紙の息づかい全体からわかってれるとよいのですが、あなたは目的を達成されました。あなたはもうわたしのことを愛していない、だからわたしももうあなたのことを愛してはいけないと、ついにこのわたしに認めさせたのです。

だから次の機会に、あなたからいただいてまだそのままになっているものをみんな送り返します。そのときにまた手紙を寄越してくるのではないか、と心配しないでください。小包にあなたの宛名を書くことさえもしませんわ。ドナ・ブリテスに頼んですべてやってもらうことにしましたから。わたしに信頼されて何かを任されるのに、彼女はもう慣れています。もちろん、今回のようなことは全然違う場合のことでしたが。自分でやるよりも彼女に任せた方がよいのです。彼女は必要なことをすべてやってくれるでしょう。あなたの絵とあなたがくださった腕輪が本当にあなたの手に渡ったと安心できるように。

でも、あなたに知っておいてもらいたいことがあります。数日前からわたしは、とても大切にしていたあなたの愛の証を、焼いわずたずたにしてしまえそうな気がしているのです。ただ、残念ながらわたしはこれまであまりにたくさん自分の弱さをさらけ出してきましたので、わたしにそんな極端なことが考えられただなんて、あなたは信じようとしないでしょね……。いただいた品々を手放すときの心の痛みから、いっそのこと一種の楽しみを引き出してくるつもりです。そうすることで、少なくともいくらかあなたを怒らせることができますしね。

あなたにとってもわたしにとっても恥づかしいことですが、告白してしまうと、わたしはこうしたつまらないもの

に、正直に言いたくないくらい執着していたのです。わたしは改めて自分の考えをすべて見直さなければなりません。その一つ一つから自分を解放するために。それは、あなたからいつか完全に自由になることができたと祈っていたことでした。理由が山ほどあれば、どうしてできないことがありますか。わたしはドナ・プリテスにすべてを渡しました。なんてことでしょ、そうしようと思えるためにどれだけ涙を流したことか！ 一人の人間のなかに幾千ものためらいが生まれてくることがあるなんて、あなたには予想することもできないでしょうね。それを一つ一つ数え上げるなんてことは絶対にしません……。わたしは彼女にお願いしました、このことについてはもうわたしに話さないでほしい、そしてたとえわたしがもう一度見たいといっても、この品々をわたしの目に入らないところにやってほしい、と。いつそれらをあなたに送るのか、わたしは知ってはいけないことになっています。

愛の病を癒すこうした努力をしなければならなくなつてはじめて、わたしは自分の愛があまりにも大きいと自覚するようになりました。この努力がどれほど困難で恐ろしいものであるか事前にわかつていたなら、わたしにそうする勇氣はなかつただろうと思います。いかなる場合でも、恩知らずなあなたのことを愛しつづけるほうが、あなたを永遠に諦めてしまうことよりも、わたしにとつてはましな苦痛だったでしょう。わたしはあなたにそれほど執着しているわけではなく、むしろ自分自身の情熱に執着しているのだとも気づきました。侮辱的な行動のおかげで、あなたはもうすっきりいとわしい人になっていました。ですが奇妙なことに、恋の情熱と闘うことにわたしは苦しい思いをしていたのです。女がふつう持っている自尊心も、あなたと訣別する覚悟を決めるのに役に立つてはくれませんでした。ああ、あなたに軽蔑されるのはもう慣れていきます。あなたに憎まれたとしても、そしてあなたがほかの女を愛しているときに嫉妬が湧き上がってきたとしても、わたしはなおも耐え抜くことができましたでしょう。そこには、闘うことのできる相手がいたのですから。ですが、まったくもつて耐えがたいのは、あなたのつれなさです。あなたが最後の手紙で恥知らずにもわ

たしとの友情を誓い、何も言っていないに等しい言葉を連ねていたことから、あなたはわたしの手紙をすべて受け取っていらつしやるとわかりました。本当に、あなたはほんのわずかも心を動かされずにわたしの手紙を読むことができたんですね。ひどく恩知らずなあなた——そしてばかなわたし、いまだに悲嘆に暮れているなんて。手紙があなたの手に届いていないのかもしれないと都合のいいことを考える力さえ、いまや残されていないのです。

あなたは、あつけらかんとして——そういうところが嫌いです。あけすけに本当のことをおっしゃってくださいなどと、わたしはお願いしましたか。わたしの恋心を、どうしてそっとしておいてくださらないのですか。お手紙なんて、書いてくださらなくてよかったのですよ。事情を説明してもらいたいなんて思ったことはありませんでした。わたしを騙す必要などないとあなたが思っていること、今なおわたしはあなたを許すことができないということ、こうしたことはわたしを不幸にしないとおっしゃるのでしょうか。ぜひと知っておいてください、わたしはもうわかっています。あなたがわたしの恋心に値しない方である、と。あなたの悪いところや卑劣なところはすべて知っていますわ。

でも、お願いです（わたしのこれまでの振舞いを鑑みて、この切なるお願いを多少なりとも聴いてもよいと思われるなら）、お願い申し上げます。もうわたしに手紙を書いてこないでください。そうすることで、わたしが完全にあなたのことを忘れる手助けをしてください。万が一この手紙を読んで不快な思いをなさったことを知らせてくるようなことがあれば、わたしはあなたの言うことを信じかねないでしょう。その一方で、わたしが手紙で言っていることをあなたが完全にお認めになるという返事を受けとったときは、怒りで猛り狂った自分の姿を想像することができます。いずれにせよ、わたしがまたもや燃え上がってしまうという結果になりかねません。

わたしがすることに、だからもう口出しをしないでください。どんなやり方で介入するとしても、あなたはわたしの目論見を覆してしまうでしょう。この手紙を読んであなたがどう思ったか、知りたくありません。わたしがいま心穏や

かな状態を作りあげようとしているのを邪魔しないでください。わたしの身の上に災いを招いたことだけで、あなたは十分満足だろうと思います。

わたしを不幸にしてやろうとあなたを駆り立てたものが何であれ、いまはそつとしておいてください。時とともに、そこからある種の安らぎを育てていくことができるようになればいいと思っています。あなたのことを憎まないとお約束できますわ。激しい感情とまた関わりあいになるには、わたしはあまりにもそれを信用していません。そのような感情抜きでなら、あなたよりも貞節な恋人がここで見つかるだろうと確信しています。ですが、ああ、わたしに愛を教えることがだれかにできるのでしょいか。他のだれかの情熱に心ひかれたりするのでしょうか。わたしの情熱でさえ、あなたには手も足も出なかったのに。わたしは悟りました。初めて心を震わせ、心が持つている未知の力を発現させるきっかけとなった人を越えていくことはできないと。心を動かす力はすべて、心が自分のためにこしらえた偶像と関係しているのです。心が最初に受けた傷は治せませんし、なかったことにもできません。そんな心を助けてやろうとやってきて、心を満たして落ち着かせようとする情熱は、またとない恋心を約束してくれますが、それも結局は無駄なのです。心はよろこびを探しますが、よろこびと出会いたいとは本当は思っていない。最終的にそのよろこびは、忘れることのできない痛み以上に心にとって大切なものはないということをお教えることにしか役に立たないのです。

どうしてわたしはあなたに思い知らされねばならなかったのでしょうか。永遠には続かない関係がいかに不完全で苦々しいものであるかを。そして、激しい恋情が片想いのときにたどる運命を、一から十まで。他の女にしか心を動かさない男たちに飽きることなく想いを寄せてしまうなんて、わたしたちにまとわりついた運命はどれほど盲目で意地悪なのでしょう。

新たな恋にいくらかの慰めを期待する権利がわたしにあつて、そして実際に信頼できる人と出会うことができたとし

ましょう。その場合、相手がどんな身分の低いお方であらうと、あなたに突き落とされたのと同じ境遇にその方を追いこんでしまったなら、わたしは最もひどい自責の念に駆られるに違いありません。そのくらい、わたしは自分自身に同情しているのです。たとえ何か思ってもみない変化が起こってあなたに復讐できるようになったとしても、あなたに優しくしてあげる義理なんてないとはいえ、そんな残酷なことをする勇氣はありません。

もっか、わたしはあなたを許そうと努力しています。わかっています、ふつう修道女は恋のお相手にあまり向いていないということは。ですが、逆にいえば、こういう女を恋人にすればいいか少し冷静に考えてみるなら、他のどんな女よりもまさに修道女を選ぶべきだとわたしには思われるのです。彼女たちがひたすら自分の情熱のことばかり考えるのを妨げるものはありません。外の女なら、たえず幾千もの娯楽に移りしたり熱中したりしますが、修道女たちはそういうものに気をそらされることがありません。愛する人がいつも幾千もの取るに足らないことにかかずらっているのを見るのは、あまり気分がいいものではないでしょう。愛する人がパーティーやドレス、プロムナードのそぞろ歩きのことしか話さないのを（絶望に陥ることなく）我慢できるのなら、その人はひどく鈍感な方に違いありません。その人は、際限なく次から次へとやってくる嫉妬にさらされます。というのも、大勢の人びとに思いやりと好意を持ち、いつでもその人たちと楽しくおしゃべりできなければならないという役目が、そういう女には欠かせないからです。そういうとき彼女らは楽しんだりしていない、こうしたことはすべて彼女たちにとっていやいや従っている受難だなんて、だれが思うでしょうか。そして、こうしたことについていちいち問い質さず、女の言うことを落着いて難なく信じることででき、彼女たちが女としてのあれやこれやの義務に専念しているのを穏やかに信頼しながら見つめている——そんな恋人のことを彼女たち自身、どれほど不審の目で見ているでしょうか……。

ですがわたしはしかるべき理由をあげて、あなたはわたしを愛さなければならぬと証明したいわけではありません

ん。これはあまり本質的ではないやり方です。以前はもっといいやり方をしていましたが、結局何にもなりませんでした。自分の運命を乗り越えていけといわれても、わたしはあまりにも運命のことを知りすぎています。わたしは一生不幸なままでしょう。あなたと毎日お会いしていたときだって、そもそもわたしは不幸ではなかったでしょうか。あなたが貞節を守っていないかもしれないと思うと、不安のあまりほとんど死んでしまいそうでした。いついかなるときもあなたと会っていたかったけれど、それは無理な話でした。あなたが修道院にやってくるとき、いつもその身を案じていました。あなたが従軍なさっているとき、まったく生きた心地がしませんでした。自分がもっと美しかったら、あなたにもっとふさわしい女だったらと思うて気が気ではありませんでした。わたしは自分の平凡な出自に不満を持っていた。見かけだけかもしれないませんが、わたしを愛してくださったせいで、あなたの名誉を損なうことがあるかもしれないと考えることもしばしばでした。あなたを十分に愛せていないと気づいてしまったこともありました。あなたも巻き込まれやしないと、自分の家族に激怒されるのを恐れていました——言ってしまったら、そのときわたしは、今とまさしく同じくらい惨めな状態だったのです。

あなたがポルトガルから去った後も愛の証を届けてくれたなら、変装するなど、ここから出るためにあらゆる手を尽くして、あなたのもとを訪ねたでしょう。ああ、あなたがもうわたしのことなど気にも留めていらっしやらなかったなら、フランスに着いてからわたしはどうなってしまうたことでしょう。きっと身も心もぼろぼろになったはず！ わたしの家族にとって、どれほど恥の極致だったでしょう。あなたをもう愛さなくなってからというもの、わたしは家族のことを大いに愛するようになったのです。

おわかりでしょうが、きわめて冷静にご説明すれば、わたしは事によつては今のわたしよりもっと哀れになっていたかもしれないのです。わたしはいま理性的に話していますね。少なくとも、人生でこの一度だけは。わたしが気

をしつかり持っているのがあなたの氣に入るかどうか、あなたがわたしに満足していらっしゃるか、そんなこと知りたくはありません。わたしはもうあなたにお願いしました、もう手紙を書いてこないで、と。もう一度、切にお願いしておきます。

わたしをどんなふうに扱ったか、まだあなたは意識されたことはいらないのですか。あなたはわたしにたいして、世界のほかの人たちに負っている以上の義務があるということを、考えてみたことはないのでしょうか。わたしは狂ったようにあなたを愛しました。どれほどわたしは、ほかのもののすべてを踏みにじったことでしょう。あなたの振舞いは名譽ある男のものではありませんよ。あなたはもととすでにわたしに嫌悪感を持っていたに違いありません。わたしへの愛ゆえにあなたが死ぬことはなかったのですから。かくもわたしの心を狂わせたのは、あなたのなかのじつに平凡なものでした。そもそも、わたしを喜ばせるために何かしたことがありますか。わたしのために何か犠牲にしたものがありますか。あなたは幾千ものほかの愉しみを追い求めていたのではなかったでしょうか。賭け事や狩り、あなたはこうしたものをやめたりしたでしょうか。あなたは一番に従軍し、そして他のだれよりも遅く戻ってきたのではないでしょう。か。あなたはまったく後先考えずに、冒す必要のない危険に身をさらしましたね。わたしのために危ないことは控えてくださいと、どんなにつよくお願いしても。あなたはポルトガルで少なからぬ名声を得ていたのに、一步踏み込んでここに居を定めようとはなさいませんでした。お兄さんから手紙をもらっただけで、あなたはほんの一瞬たりともためらわずに旅立ったのですね。おまけに、あなたが旅のあいだずっと上機嫌だったこと、そんな知る必要もなかったことも耳に入ってきました。

正直に申し上げますが、わたしは本当に、あなたをげげしく憎む道しか見えていません。ですが、この苦しみをわが身に招いたのは、すべてわたしが自分でやったことなのです。率直すぎるほど率直に申し上げますと、わたしは最初か

ら情熱を燃やしすぎて、あなたはそれに慣れてしまったのです。愛してもらおうと思ったなら、もっと手練手管を用いなければなりません。恋心に火をつける方法を巧みに見つけ出さねばなりません。ただ愛するだけでは、愛されることはできないのです。わたしにあなたを愛させようと思いましたね。これは計略でした。ひとたびその計略が決まれば、それを遂行するためにあなたは拔かりなく準備を整えていました。必要とあらば、あなたはわたしを愛することさえ最終的に決心したことでしょう。ですが、計略を遂行するさいに、愛などなくとも目標を達成できるのだ、愛などまったく必要ではないのだとあなたはすぐに気づきました。なんて卑劣なのでしょう。あとで罰を受ける心配なしにわたしを騙すのは、そんなに簡単なことだとあなたは思いなのです。いつかあなたがこの国にもう一度足を踏み入れることがあれば、わたしがあなたを家族の復讐の手にゆだねると確信なさって結構です。

わたしは長いあいだ我を忘れて、偶像崇拜に生きてきました。それを思うと、おぞましくて体が震えてしまいます。わたしは良心の呵責に、耐えがたいほどきびしく苛まれています。あなたがわたしに犯させた犯罪が恥ずべきものとすると身にしみて感じますし、その罪の恐ろしさをすべて覆い隠してくれたわたしの情熱は、残念ながらどこかへ行ってしまうしました。わたしの心はいつ落ち着くのでしょうか。いつわたしはこの苦痛から解放されるのでしょうか。それなのにわたしは、あなたに悪いことが起きますようにとは望んでいないと思います。そしてついには、反発することなく、あなたが幸せになることを受け入れるのでしょうか。ですが、あなたに人の心があるのなら、いったいどうして幸せになることができるのでしょうか。

しばらくしてわたしが今より心穏やかになれた暁には、あなたにもう一度手紙を書いてそのことをお知らせするつもりでいます。あなたの極悪非道な行いがわたしにとって痛くも痒くもなくなったら、それを非難してさしあげます。きつと楽しいことでしょうね。あなたのことを軽蔑しています、騙されたことを今はいたって冷静に話せます、痛みは

すべて忘れてしまいました、わたしがあなたを思い出すとすれば、それはふとあなたのことが脳裏をよぎったときだけ——と、ようやくわたしがお伝えできるようになったらの話です。

わたしは今も認めなければなりません。あなたがわたしより遥かに強い立場に立っていたことや、理性を失わせるほどの情熱でわたしの心をいっぱいにしたことを。でも、こういうことをあまり自慢に思ってはいけませんよ。わたしはまだ若く、人の言うことを簡単に信じやすい性格で、小さいときからこの修道院に閉じこめられていたのです。そこで出会った人のことはみなあまり好きではありませんでした。あなたがいつもわたしに囁いた甘い言葉は、これまで聞いたことのないものでした。わたしに美点があるのも、わたしがきれいなのも、あなたのおかげだと思われました。それを見いだして、意識させてくれたのはあなたなのですから。あなたのいい噂をよく耳にしました。世界中があなたの味方でした。わたしの恋心を刺激するためなら、あなたは何でもやりました。ですが、わたしはついに、あなたにかけられた魔法を解いてしまいました。誠実にもあなたがその手助けをしてくださったのです。包み隠さず言えば、わたしにはとりわけこうした助けが必要だったのです。

いただいた手紙は送り返しますが、最後の二通（第一の手紙の前にもらった一通と、第五の手紙の前にもらった一通をさすと思われる）だけは大切に残しておいて、ときどき読み返すつもりです。場合によっては、初めの頃もらった手紙よりも、もっと頻繁に。これを読めば、弱気にならずにいられるでしょうから。わたしにとってはそれほど大きな痛み手だったのです、この二通の手紙は。これから先あなた以外に何も愛してはいけない、ということでしたらわたしは幸福だったでしょう。わかっています、今もあなたの不実を責めてばかりいることは。ですが、ご存じでしょう、わたしは心穏やかな境地に達するのだと自分に約束しました。そして必ずそうなります。もしもそれができない場合は、意に反してでもなにか極端な手段を講じなければなりません。それを知ったって、あなたの心はあまり動かないでしょう

が……。でも、わたしはもうあなたに何も望みません。わたしはいつも同じことばかり言う愚か者です。あなたを諦めること、もうあなたのことを考えないこと、必要なのはそれだけです。わたしはもうあなたに手紙を書かないような気さえてしています。わたしのあれやこれやの思いについてあなたに詳しく説明する義務が、最後にわたしに残っているでしょうか……。

終

〈訳註〉

[1] この *meine Liebe* (フランス語では *mon amour*) が恋人シャミリーのことを指しているのか恋心自体を指しているのかについてはこれまで議論になっていた。寺迫紀子は、第一の手紙冒頭の段落の途中まではフランス語の人称代名詞 *je* が、それ以降第五の手紙にいたるまで人称代名詞 *vous* が使われていることに注目し、この *je* は恋心 (*mon amour*) への呼びかけで、以降の *vous* はシャミリーへの呼びかけであると解釈した(寺迫紀子『*Considère, mon amour…*』試論——*amour-passion* と *amour-amant*——、九州フランス文学会『フランス文学論集』第二十巻、一九八五年)。リルケの翻訳においては人称代名詞はすべて *du* であり使い分けはなされていないが、*meine Liebe* がシャミリーのことを指していると解釈すると、次の文の *Unseig* が何を指すかわからなくなり、さらにその次の文の *ihresgleichen* が指すものも不明になることから、リルケも *mon amour* を恋心そのものと解釈していると見

なした。

〔2〕 この部分はフランス語とリルケが訳したドイツ語で意味が異なっている。フランス語のほうでは「苦痛に曝される」のはマリアナであり、そうすると彼女はここでシャミリーにもう自分のことを考えてもらえない苦痛を訴え、自分を捨てなくてと懇願していることになる。しかしリルケは、*es*（シャミリー）が主語の文章に *preisgegeben* … と分詞構文をつないでいるので、*preisgegeben* の主語はシャミリーとなる。そうすると現れてくるのは、自分のことをもう考えられないことはシャミリーにとってさぞ苦痛だろうと自信たっぷりに皮肉っぽく言っているマリアナの姿である。四三頁表二より、この段落はマリアナの【自尊】の要素が強く表れた箇所であることが見てとれるが、リルケの翻訳によってそれがより強まっていると考えることができる。

〈解題〉

以上が、ライナー・マリーア・リルケ訳『マリアナ・アルコフォラードの手紙』⁽¹⁾の全訳である。この手紙は一般には『ポルトガル文』と呼ばれており、ポルトガルの修道女マリアナ・アルコフォラードが書いた手紙という体裁をとっている。⁽²⁾この手紙が書かれたとされる十七世紀、ポルトガルの再独立をめぐって、ポルトガルを後援するフランスと自国からの独立を阻もうとするスペインは戦争状態にあった。ポルトガルに派遣され武勲を立てていたフランスの軍人シャミリーを、マリアナは修道院のバルコニーから一目見て恋に落ちる。二人は恋人となるが、シャミリーは帰国の命令を受け、フランスへと帰った。シャミリーに捨てられてマリアナはうろたえ、五通の手紙を書いた——手紙のいきさつはこのようなものである。『ポルトガル文』は一六六九年にバリで出版された。リルケはこれを一九一三年にフランス語

からドイツ語に翻訳している。リルケの翻訳より前の一九〇五年にも、デンマーク人カール・ラルセンの『修道女マリアナと愛の手紙』をマティルデ・マンが独訳して出版していたが、リルケはこのラルセン版『ポルトガル文』も読んでいた。一九一二年三月五日の手紙には、ラルセン版が原典のフランス語ではなくデンマーク語からの翻訳であることに苦言を呈し、みずからの手で翻訳しようと意気込む様子が見られる⁽³⁾。

『ポルトガル文』がリルケをかくも惹きつける理由はなにか。それは、この手紙の主マリアナに、リルケが〈愛する女〉という愛の理想型を見たからである。彼の愛の観念はきわめて独特で、〈所有なき愛〉と呼ばれてきた。通常なら、自分の愛する相手から自分も愛されたい、愛する相手を所有したいと思ってしまうだろうが、リルケは徹底的にそうした考え方を斥ける。彼の〈所有なき愛〉の観念は、『マルテの手記』（一九一〇）の末尾におかれた放蕩息子の子のエピソードで、次のように語られている。

かなり後になってはじめて、もうだれも愛すまいとそのときどれほど固く決心していたか、彼〔引用者註…放蕩息子〕は気づくことになるだろう。それは、愛されるという恐ろしい状態へと、だれをも突き落とさないようにするためだったのだ。数年たって彼はこう思い至ることになるが、だがほかのさまざまな決意と同じく、これも不可能なことだった。彼は孤独のなかで愛し、そしてまた愛してしまった。そして愛するたびに、彼は自分の本性を残らずなげうって、相手の自由を言いようもないほど気づかうのだった。感情の光のなかで愛の対象を貪るのではなく、その光で相手の姿をくまなく照らすことを、彼はゆつくりと学んでいった。そしてだいに透明になっていく恋人の背後に、限らない所有の欲望の前に開かれた広やかな世界を透かし見て、彼は陶然とするのだった。⁽⁴⁾ [SW VI, 941]

放蕩息子、家族に愛されて期待や不満を押しつけられることで、愛されることの苦しみを知った。愛されることが自分の自由をいかに奪うかを、身をもって思い知った。それゆえ彼はもうだれも愛さないと心に決めていたが、それでも愛することをやめられない。彼は「愛の対象を貪る」性愛によって相手の自由を損なわないよう心を砕きながら、愛するすべてを学んでゆく。〈所有なき愛〉の眼目は、性愛と隔絶した世界で、互いの孤独と自由をどこまでも発展させていくとすることにある。そうして愛していると、相手の具体的な姿が徐々に失われてゆき、相手の人間としての核といえるものが浮かびあがってくる。そこまで到達したとき、極限まで純化された相手の姿だけでなく、その相手と不可分に結びついた超越的な世界が、愛する者の目の前に開示されるのである。〈所有なき愛〉とは、性愛を排して相手を愛することによって、人間に到達できる精神的高みの極北に昇りつめようとする試みといえるであろう。

〈愛する女〉の愛もまた、〈所有なき愛〉である。リルケが〈愛する女〉の具体例として挙げるマリアナ、エロイーズ、ガスバラ・スタンパたちは、みな愛する男に捨てられた女たちだ。そもそも相手が不在であるため、相手を所有するという望みは最初から絶たれている。そういう意味で〈所有なき愛〉ではあるのだが、それだけではない。彼女たちの愛は、愛の対象を乗り越えていくという点で、現実的な愛を超えた位相にあるのである。マルテは言う。

「……」彼女たちは昼も夜も耐え抜き、愛と苦しみをふくらませていったのだ。そうして彼女たちは、終わりなき苦しみの重圧を背負って、激しく愛する女になった。男を呼びながら男を克服したのだ。男が戻ってこなければ、その男を越えていったのだ。ガスバラ・スタンバやボルトガルの女のように。自分の苦悩が、もはや抱えておくことができなほどきびしく氷のように冷たい壮麗さを湛えるようになるまで、彼女たちは愛することをやめなかつ

たのだ。[SW VI, 832f.]

男から満足な応答がもらえず苦しむうちに、彼女たちは現実の相手を「越えて」、「激しく愛する女」になった。別の箇所です。「そのような愛は、応答を必要としないのだ。呼びかけも応答も、その愛の内にはじめから存在するのだ」[SW VI, 898]と言われているように、彼女たちの愛には現実の相手もその相手から愛し返されることも必要ないのである。情熱がその対象を持たないとき、彼女たちの「愛する」という行為は自己完結したものとなる。言い換えれば、現実の男と関わる態度や取り結ぶ関係というよりも、彼女たちが到達した精神的境地のほうにリルケはつよい関心を寄せていることがわかる。そしてマリアナによって、リルケはこうした〈愛する女〉という人間のあり方に目を開かれ、〈所有なき愛〉という愛の観念を展開していくことになったのである。

さてそのマリアナであるが、男に捨てられてから男と訣別するまでの彼女の五通の手紙には、「愛がかくも成長していくさま」[SW VI, 999]が如実に表れているとリルケはいう。そこでマリアナが〈愛される女〉から〈愛する女〉へと変化する過程を見ていくために、それぞれの手紙を分析してみよう。まず、〈愛される女〉と〈愛する女〉として、以下のようにそれぞれ三つの要素を設定した。

〈愛される女〉

- ①【屈従】…自分自身よりも相手を重視し、相手に自分を捧げようとする。
- ②【応答の必要】…相手からの返答や愛し返されることといった見返りを自分の愛に求める。
- ③【相手への依存】…情熱の対象としての相手が存在し、その相手に依存する。

〈愛する女〉

- ①【自尊】：相手よりも自分自身を重視し、自分の立場を主張する。
- ②【応答の不要】：相手からの返答や愛し返されることといった見返りを自分の愛に求めない。
- ③【相手からの解放】：情熱の対象としての相手が存在しなくなっている。

同じ数字は互いに対をなす項目となっており、たとえば〈愛される女〉の①【屈従】に〈愛する女〉の①【自尊】が対応する。①で相手に自分を捧げようとするのにたいし、①では自己主張が前面に出てきている。二番の「応答」とは、リルケが『マルテの手記』で言う意味で用いており、たんなる相手からの返答だけでなく、愛し返されることをも含む。自分の愛に相応する言動を相手に要求していると見なされる場合は②に、自分の愛と相手の言動とを切り離して考えていると見なされる場合は②に分類した。③は、〈愛する女〉の愛においては相手が「克服」され「越え」られていることを踏まえて設定した。それと対になる③は、情熱の対象たる相手がいまだ存在しており、その相手に依存している場合を指している。以上、手紙のなかからこれらの要素に該当する文章を抜き出し、〈愛される女〉と〈愛する女〉に分けて、手紙ごとに表一〜五にまとめた。この表をもとに、それぞれの手紙にどの要素が顕著に見られるかだけでなく、〈愛される女〉と〈愛する女〉のあいだをマリアナがいかに揺れ動いたかを考察していきたい。

第一の手紙

表一

〈愛される女〉	
【応答の必要】	あなたがいないなんてわたしには耐えられません。(二頁)
【相手への依存】	でもわたしには、ある種の不幸への嗜好があるように思われるのです。その唯一の原因があなたである、そんな不幸への嗜好が。(二頁)
【屈従】	あなたを一目見た瞬間に、わたしの命はあなたのものになりました。わたしはどうやってでも、喜んであなたに命を捧げたいのです。(二頁)
【屈従】	でもだめなのです、わたしはこうもあなたのことを悪しざまに言う気になれません。わたしがあなたを弁護するのは、むしろただわたし自身のためなのです。(二頁)
【屈従】	あなたのために命をとっておいてはいけない、だから命を落とさなければいけないはずなのに生きながらえてしまうのは嫌だと、わたしは抵抗しました。(三頁)
【相手への依存】	わたしは不満を漏らすことなく苦しみに耐えています。その苦しみもあなたあつてのことなのですから。(三頁)
【応答の必要】	ねえ、わたしがあんなにもやさしく愛してさしあげたのに、あなたはこんな仕打ちをするのですか。(三頁)

〈愛する女〉

	【応答の不要】 でもそんなこと、わたしにはどうだっていいんです。わたしは決めているのです、生涯をかけてあなたをお慕いすることを。ほかの男のひとりには目もくれないことを。(三頁)
	【自尊】 そして断言しますが、あなたもわたし以外のだれも愛さないようにしたほうがいいですよ。わたしのうちに燃え立っていない情熱に、あなたは満足できるのでしょいか。(三頁)
【相手への依存】 わたしはあなたを忘れることなんてできませんし、また帰ってきてしばらく一緒に過ごしてくださいという希望を抱かせてくれたことも忘れません。(四頁)	
【応答の必要】 ああ、どうしてあなたは、わたしと生涯をともにしたいとお思いにならないのでしょうか。(四頁)	
	【自尊】 修道院にいたわたしを、どうしてそっとしておいてくださらなかったのでしょうか。わたしがあなたに何かしましたか。(四頁)
【屈従】 でもお許しください、あなたをお咎めしているわけではありません。復讐しようと考えてもできません。(四頁)	
【応答の必要】 もしわたしの人生に同情してくださいるなら、たびたび手紙をくださいね。「……」そしてなによりも、来てください。(四頁)	
【応答の必要】 さようなら、わたしを愛して、ずっと。(五頁)	

「わたしの恋心」(meine Liebe)への悲痛な呼びかけに始まる第一の手紙は、全体的に〈愛される女〉の嘆きに覆われている。表一に如実に表れているように、この手紙には、ひどい仕打ちを受けたにもかかわらず依然として相手に自分を捧げようとする【屈従】の姿勢が多数見てとれる。とりわけ第一の手紙においては、「わたしの命はあなたのものになりました」、「あなたのために命をとっておいてはいけない、だから命を落とさなければいけない」といった、自分の命までも相手のものだと見なすほどあからさまな【屈従】の表現が見られる。また第一の手紙におけるマリアナの嘆きは、自分に手紙を書いてほしい、会いたい、愛してほしいという、相手からの【応答の必要】に貫かれている。

しかし、マリアナの〈愛する女〉への変身を予感させるような展開も見られる。彼女は「ねえ、わたしがあんなにもやさしく愛してさしあげたのに、あなたはこんな仕打ちをするのですか」と、自分の愛への見返りを要求する言葉を投げかけたそばから一転、応答は必要ないと述べるのである——「でもそんなこと、わたしにはどうだっていいんです。わたしは決めているのです、生涯をかけてあなたをお慕いすることを」。相手が自分をどう扱うかにかかわらず自分は相手を愛することを心に決めている、とマリアナは高らかに宣言する。そして後に続く「そして断言しますが、あなたもわたし以外のだれも愛さないようにしたほうがいいですよ。わたしのように燃え立っていない情熱に、あなたは満足できるのでしょいか」という言葉は、一見すると相手に愛されることを求めている言葉のように受けとれるが、たんなる【応答の必要】とは位相が異なっている。これまでと同じ弱気な態度で愛を求めるのではなく、彼女は自分の情熱を誇りに思っているからこそ、相手に自分を愛するよう勧めている。それゆえこの言葉は【自尊】に分類されるべきであろう。ここでは二転三転するマリアナの発言が積み重なった結果これまでとは違った位相に到達するという、いわば弁証法的なダイナミズムが見られる。とはいえ第一の手紙においては、こうした変化の兆しはまだほんの一瞬しか見られず、最後にはまた相手からの応答を求める嘆きに終わっている。

第二の手紙

表二

〈愛される女〉	〈愛する女〉
【応答の必要】 それなのに、あなたは手紙を書いてくださらなかった。あなたはわたしに最低な仕打ちをしたのです。あなたは度を越して恩知らずです。(五頁)	
【屈従】 でも、こうした行いがあなたに災いをもたらすのであれば、わたしは取り乱してしまうでしょう。わたしが何らかのかたちで復讐に乗り出すよりも、あなたの行いがまったくもってお咎めなしのままにいるほうがましなのです。(五頁)	
【屈従】 しかし仮に弁解することなど考えていないとしても、あなたに向けられたわたしの愛は揺るぎなくあなたの味方をしています。わたしがあなたの罪を問うのも本当は、そのあとであなたのことを自分で弁護するのに喜びを覚えてしまうという、ただそれだけの理由からなのです。(六頁)	【自尊】 ずっとポルトガルにいるわけではないということを、あなたはきつとご存じだったのでしょうね。なのになぜ、あなたはそこでよりによってわたしを見つけ出して、こんな惨めな状態に突き落としたのでしょうか。「……」しかし、あなたがわたしにしたことは、気に入られようと心を砕く恋人というよりは、むしろ冷酷にだれかを追い回す暴君のすることのように思えるのです。(七頁)

【屈從】 ああ、あなたのものであるわたしの心に、こんなひどいことをするのは何のため？（七頁）			【相手への依存】 わかっていきます、わかっていきますよ、わたしが狂ったようにあなたを愛していることは。それなのに、心に歯止めがきかないのを嘆くなんてこと、思いもよらないのです。「……」幾千もの責め苦のまっただ中でたった一つの幸福に出会うことがなければ、わたしは生きてゆくことができないでしょう。その幸福とは、それでもあなたを愛しているということなのです。（八頁以下）
	【自尊】 どんな理由もわたしには不十分に思えたでしょう。わたしをあなたから引き離すことのできたような理由など、およそ存在しないのです。それなのにあなたは、フランスに帰るために見つけてきた口実をいくつも並べ立てましたね。（八頁）	【自尊】 しかし、この無慈悲な別れがわたしたちの定めとなった今となっては、わたしの方は不実な女にならずにすんだと喜ぶこともできません。たとえ世界が減んだとしても、わたしはそんな悪辣なことはしなかったと言いつづけるでしょう。「……」わたしを捨てて今後二度と会わないと、ほんとうに心をお決めになることができましたのですか。わたしのことをもう考えられないという、逃れようのない苦痛に曝されても——「……」。（八頁）	

【相手への依存】 わたしは自分の情熱に嫉妬しているのです。わたしもこの情熱のように、あなたと関係のないことは何もできないしそうする義務もないと思うことができればいいのに、と。そうなのです、人生の一瞬一瞬をすべてあなたのために使わないのなら、それはわたしにとって心残りなのです。（九頁）	
【相手への依存】 ああ、わたしの心で渦を巻いて溢れんばかりの愛と憎しみが消えてしまえば、わたしはどうすればよいのでしょうか。たえず心をかき乱すものを克服して、落ち着いて我慢よく生きていくことができるようになるでしょうか。いいえ、そんな空疎さ、そんな何も感じない状態は、わたしにはなんの意味もないのです。（九頁）	
【応答の必要】 でも、だれもあなたを愛さず、あなたにもだれのこととも好きにならないでいてほしいのです。馬鹿げたことだし、ありえないことです。（二一頁）	
	【自尊】 それでも、わたしは十分知っています。あなたはたいなる愛情を抱ける人ではないということを。（二一頁）
【屈従】 しまいにわたしは思うでしょう、あなたになんらかの筋の通った言い分がありますように、と……。もちろんわたしはそれを聞くともっと不幸になるでしょうが、そうするとあなたはそれほど多くの罪を背負わずともよくなるでしょう。（二一頁）	

【屈従】 ほかの女がきびしく冷たい振舞いをするほうが、わたしが何でもお認めするよりも、あなたの心をつかむのでしょうか。ひどい扱いを受けるほうがあなたには魅力的だなんて、そんなことありうるでしょうか。（二二頁）	
【屈従】 あなたを取り巻く状況にわたしは完全に取りこまれてしまつて、自分自身の自由はかけらも残されていませんでした……。時折、わたしがあなたに屈服しすぎるあまり、あなたがいま愛している女にかしづくことさえできてしまいそうな気がします。「……」そんなのです、あなたを非難すると、非難する自分が悪いのだと心底感じてしまいます。（二三頁）	
【相手への依存】 手紙を書きながら、あなたに話しかけているような気がします。あなたのことをほんの少しでも近くに感じています。（二三頁）	
【屈従】 もちろん、あなたが受け入れてくれない愛の話をいつたいどうしてすることがありますでしょうか。そんなことはもういたしません。（二三頁）	
【屈従】 わたしがいなりになったばかりに、ただわたしから離れるために五百マイルも逃げ、難破の危険に身をさらさなければいけないほどあなたに嫌われるなんて。（二三頁）	
	【自尊】 だからであれ、わたしはこんな仕打ちを受けるいわれはありませんわ。（二三頁）

【応答の必要】 あなたはわたしにとってなんてかけがえない存在でしょう、それなのにわたしにたいしてなんて非情なのでしょう。あなたは手紙を書いてくれませんか。（二四頁）	
【屈従】 さようなら、お許しください。わたしを愛して、なんてもうお願いできません。（二四頁）	【相手からの解放】 でも、それが何だっていうの。行くなら行ってしまいなさい。わたしはあなたのためではなく、わたし自身のために書いているのですから。（二四頁）

第二の手紙においても、全体を通して目につくのは【屈従】の言葉である。自分を裏切った男を、マリアナはなお擁護せずにはいられない。「わたしがあなたの罪を問うのも本当は、そのあとであなたのことを自分で弁護するのに喜びを覚えてしまうという、ただそれだけの理由からなのです」など、自分でなじっておいて自分で擁護するという自家中毒じみた発言も見られる。第一の手紙に引き続いて、マリアナはいまだ自分よりも相手を重視した考え方をしているといえよう。

ただ、第一の手紙に見られたような〈愛する女〉の要素は第二の手紙にも存在する。たとえば、「あなたがわたしのもとから去っていくために口にしたのとはまったく別の理由にだって、わたしは抗うことができたでしょう」「しかし、この無慈悲な別れがわたしたちの定めとなった今となつては、わたしの方は不実な女にならずにすんだと喜ぶこともできましよう。たとえば世界が減んだとしても、わたしはそんな悲しいことはしなかったと言いつづけるでしょう」という

言葉だ。ここでマリアナは相手の不実を非難しているが、それは自分自身の情熱にたいして揺るぎない誇りがあるからである。自身の情熱の価値を信じているからこそ、情熱のかけらもない相手の振る舞いは非難すべきものとなる。また、手紙の終盤では、マリアナの語りがディアロックからモノロックへと変化しているのがありありと見てとれる。彼女は「手紙を書きながら、あなたに話しかけているような気がします」と言うものの（「相手への依存」）、その数段落あとでは「わたしはあなたのためではなく、わたし自身のために書いているのですから」と考えを翻している（「相手からの解放」）。この【相手からの解放】の発言の直前では、手紙を早く書き終えて渡すよう催促する将校への不満が述べられるが、「でも、それが何だっというのでしょうか。行くなら行ってしまうなさい」と態度を一変させる。これは一種投げやりにも思われるが、なぜ手紙を書くのか自分に問いかけ、ついにその答えに気づいた瞬間がそのまま表現された箇所なのである。一見ただ恨みつらみを重ねているあいだにマリアナの考えが正反対の方向をとるのも『ポルトガル文』の大きな特徴である。〈愛される女〉から〈愛する女〉への変化は急激で、飛躍的なものだ。

こうした要素はあるものの、第二の手紙においても最終的に勝るのは〈愛される女〉の側面である。「でも、だれもあなたを愛さず、あなたにもだれのことでも好きにならないでいてほしいのです」と相手を排他的に所有することを求めたあとに、「それでも、わたしは十分知っていますのです。あなたはたいなる愛情をいただける人ではないということ」と言いつて、相手の情熱の貧弱さを批判し突き放す。ここからそのまま〈愛する女〉としての言葉が続くのかと思いきや、しかし最後には「しまいにはわたしは思うでしょう、あなたになんらかの筋の通った言い分がありますように、と……。もちろんわたしはそれを聞くともっと不幸になるでしょうが、そうするとあなたはそれほど多くの罪を背負わずともよくなるでしょう」と、相手を擁護する言葉に終わってしまう。まさにマリアナ自身が語っていたような、相手を非難しやすくみずから弁護に回ってしまうという状態である。「時折、わたしがあなたに屈服しすぎるあまり、あなたがい

ま愛している女にかしづくことさえできてしまいそうな気がします」というマゾヒスティックな言葉こそ、第二の手紙におけるマリアナの心境をよく表している。彼女は自分の情熱に誇りを見いだしつつあるものの、いまだ自己より相手を優先させて屈伏してしまう姿勢から抜けだせずにいる。

第三の手紙

表三

〈愛される女〉	〈愛する女〉
【屈従】 わたしにどんな女になれというのでしょうか。わたしにどうしてほしいと、あなたはお望みでしょうか。(一五頁)	
【応答の必要】 ああ、わたしは言葉では言い表せないほど嘆かわしい境遇です。自分の苦しみをあなたと分かち合うこともできずに、不幸のなかに一人ぼっちでいなければいけないのですから。(一五頁)	【自尊】 ……こういうことは、あなたにしてみれば不幸ではないのでしょうか。わたしの献身からこんなつまらない快樂しか引き出すつもりがないのなら、あなたはほんのわずかの思いやりも持つ必要はないのでしょうか。「……」わたしは(あなたのために、ただただあなたのために)泣いています、あなたが本束手に入れるはずだった無限のよろこびのことを思つて。「……」あなたがそんなよろこびを知っていたら、それはわたしを誘惑したよろこびよりも豊かなものだ、間違いなくお認めになるでしょう。愛されるよりも自分で激しく愛するほうがはるかに幸せです、自分の心を熱く揺さぶるものを感じることができる——そんな体験をあなたはなさることができたはずで。 (一六頁)

【屈從】 あなたの苦しみを思うほうが、自分の苦しみの相手をするよりも幾千倍も心の痛むことなのですから。（二七頁）	
【応答の必要】 ですがわたしは、もうわたしのことを思い出さなくてくださいと言う決心もつきかねているのです。正直に申し上げますと、わたしは狂おしいほど嫉妬しています。（二七頁）	【応答の不要】 わたしは自分でも、なぜあなたに手紙を書いているのかわからないのです。よくよくわかっています、あなたはわたしにせいぜい同情の気持ちしか抱かないでしょう。わたしはあなたに同情などしてほしくありません……。 （二七頁）
	【自尊】 にもかかわらず、はっきりと感じます。「……」わたしはあなたへの心からの愛ゆえに、もつと大きな危険と渡りあえばよかったと。わたしの人生と名誉を賭けたことは、わたしにとっては不幸なよろこびなのですから。（二七頁）
	【自尊】 わたしは生きながらえているのです。不実なわたし。わたしは人生をめちゃくちゃにするようなことをたくさんしていますが、その一方で生きるために必要なことも同じくらいしてしまっているのです。恥ずかしくて死んでしまいたいそうです。つまり、わたしの絶望は手紙のなかだけのことなのです。幾千度お誓いしたとおりにあなたを愛しているのなら、わたしはとくに死んでいなければならぬでしょう？（一八頁）

【屈従】 わたしをひどく扱ってください。わたしの恋心が強くなんかないことに気づいてください。この程度の恋心に満足しないでください。僕への愛のために死んでくれとおっしゃってください。お願いですから、そうやってわたしを助けてください。わたしが女という性の弱さを克服し、この優柔不断な行動すべてを真の絶望のなかで終わらせられるように。(一八頁)	
【応答の必要】 わたしが悲劇的な最期を迎えたら、さすがのあなたも折にふれてわたしのことを考えてくれるようになるでしょうね。(一八頁)	
【相手への依存】 わたしはこう書きながら、あなたに会えなかった自分よりも、あなたへの愛ゆえに惨めな女になった自分のほうがいいと思っています。よくよくわかっているのです。(一八頁)	
【応答の必要】 わたしが深い悲しみのうちに死んでしまったら、心をこめてわたしを悼んでくださると約束してください。少なくとも、わたしの愛の切実さを思って、他のどんな女にも欲望や愛情を抱かないと約束してください。それはわたしにとって十分な慰めとなるでしょう。あなたを永遠に諦めなければいけない以上は、せめてあなたを他の誰のものにもしたくないのです。(一九頁)	
【屈従】 これまであなたに書いた手紙はどれも長すぎましたね。わたしはあなたを十分に思いやるできませんでした。お許しくださいませ。分別を失った哀れな娘にたいして、あなたが多少なりとも目をつぶってくださいることを望みます。ご存じのように、この哀れな娘も、あなたと出会う前まではまともだったのです。(一九頁)	

【相手への依存】

ですが、わたしは心の底から、あなたが与えてくれた絶望に感謝しているのです。あなたと知り合う前に自分が生きていた平穏な日々⁽³⁾にたいしては、嫌悪感⁽⁴⁾はありません。さようなら。一瞬ごと⁽⁵⁾にわたしの愛は大きくなっています。(一九頁)

マリアナの嘆きの色調に変化が見られるのが第三の手紙である。手紙の冒頭こそ【屈従】の言葉で始まるが、それからしばらく自分自身の境遇を嘆いたあと、彼女は急に態度を変えて自分の情熱を誇り、自分と同じくらい強い情熱を持たない相手を憐れむ。「……こういうことは、あなたにしてみれば不幸ではないのでしょうか。……」わたしは（あなたのために、ただただあなたのために）泣いています、あなたが本来手に入れるはずだった無限のよろこびのことを思つて」。そして畳みかけるように、「愛されるよりも自分で激しく愛するほうがはるかに幸せですし、自分の心を熱く揺さぶるものを感じることができると、そんな体験をあなたはなさることができたはずです」と、愛するよろこびをうたう。マリアナは事ここに至つて、シャミリーを愛したことを後悔などしていない。激しく燃え立つ自分の情熱を肯定し、相手にもこうした情熱を抱くよう強く要求する。ここに、リルケが「エロースは苛酷で貧しく、相手のための困苦であり、相手にたいする要求であり、この相手に美しく、力づく、愛する者になつてほしいという、じつに大いなる、至福の、熱烈な願望なのです」と語る、彼の愛の観念が存しているように思われる。シャミリーはマリアナのこの要求に応えることができなかった——いや、応えようとも思わなかった。

第三の手紙においては、このように自身の情熱そのものにこだわった【自尊】の表現が多くみられる。マリアナははっきりこう感じている、「わたしはあなたへの心からの愛ゆえに、もつと大きな危険と渡りあえばよかったと。わたしの

人生と名誉を賭けたことは、わたしにとっては不幸なよろこびなのですから」。表面的には「不幸」と言いながらも、マリアナがすべてをなげうってシャミリーを愛したことを肯定し、しかも誇りに思っていることがわかる。このあとにもさらに【自尊】の言葉が続く。「わたしは人生をめちゃくちゃにするようなことをたくさんしていますが、その一方で生きるために必要なことも同じくらいしてしまっているのです。『……』幾千度お誓いしたとおりにあなたを愛しているのなら、わたしはとくに死んでいなければならぬでしょう?」ここでマリアナは、一見すると相手のために死ななければならないと言っているように見える。だが先ほどの【自尊】の箇所からの連続であることを踏まえると、相手のために命を捧げるという【屈従】ではなく、自分の情熱のために死ななければならないということを言っていることがわかる。この一連の箇所は最終的に「わたしをひどく扱ってください。『……』お願いですから、そうやってわたしを助けてください」という【屈従】の言葉で終わっているが、全体的に見たときには、自分の情熱を肯定する姿勢がよく表れていることが第三の手紙の特徴だといえるであろう。他にも「あなたに会えなかった自分よりも、あなたへの愛ゆえに惨めな女になった自分のほうがいいと思っている」、「わたしは心の底から、あなたが与えてくれた絶望に感謝しているのです。あなたと知り合う前に自分が生きていた平穏な日々にたいしては、嫌悪感しかありません」など、情熱の向かう先としての「あなた」をいまだ残しながらも、その「あなた」の存在と同等、あるいはそれ以上に愛ゆえの苦悶それ自体にこだわっていることが読みとれる。

第四の手紙

表四

〈愛される女〉	〈愛する女〉
	【自尊】 自分の胸のうちの思いをあなたに書いて伝えていると、自分がその思いにたいして最低なことをしていると感じてしまいます。あなたご自身も強い思いを自分の胸の内に持っていてわたしの思いを察してくださるのでしたら、どれほど幸せでしょう。(一九頁以下)
	【自尊】 あなたがいまなさっているように、わたしのことを忘れるという虐待じみたことはしないほうがよいですよ。「……」あなたがわたしのもとを去ろうと決心なさったのがわかったときに予見できた不幸を、好きなだけあなたの前で嘆かせてもらえると期待する権利くらい、少なくともわたしにはあります。(二〇頁)
【応答の必要】 しかし、そんな心境からもわたしはいまや遠く離れています。六か月のあいだ、一通の手紙ももらっていないのですから。(二〇頁)	
【応答の必要】 もう以前のように、あなたがわたしの部屋で心と体を燃え立たせ、恍惚としている姿を見ることはないのでしょいか。ああ、ああ、いつもこの話になってしまいますね。(二〇頁以下)	
【屈従】 しかしわたしはあなたの前に身を投げ出しました、すべてを捨てて。「……」わたしはなおのこと享乐的に、不安をあなたのためには押し殺し、あなたの魅力と嘘偽りの約束に身をゆだねました。(二二頁)	

【相手への依存】 もうあなたを愛さないなら、その瞬間、苦悩から解放されるでしょう。それにしても、なんとという手段でしょうか！ 嫌です、あなたを忘れるくらいなら、もっとこの苦悩に耐えていくほうがよいのです。(二二頁)	
	【自尊】 嘆かわしいのは、わたしよりもあなたです。といいますのも、フランスの愛人から与えられる薄っぺらな愉悅に浸っているあなたよりも、いま味わっているような苦しさを味わい尽くそうとしているわたしのほうがずっとよいからです。無関心でいられるあなたを羨んだりはしません。あなたはかわいそうなお方です。ですが、あなたが完全にわたしのことを忘れられるかどうか、確かめてみたいものですわ。わたしがいないと生半可な快樂しか得ることができないというところまであなたを変えたのは、わたしの誇りです。そして、わたしはあなたよりも幸せなのです。あなたよりもはるかにたくさん、頭を悩ませているのですから。(二二頁以下)
【屈従】 あなたに付いていけばよかった。そして本当に、彼らよりもかいがいしくあなたにお仕えすることは、わたしの真心からすればたやすいことだったでしょう。(二二頁)	
【屈従】 ですがあなたは、あなたの意志に屈服するようにわたしを躰けたのです。いえ、それでも、わたしはあなたを崇拜していたことを後悔していません。あなたがやって来てわたしを誘惑したことは、喜ばしいことなのです。(二二頁)	

	【応答の不要】 あなたが冷酷にも、もしかすると永遠にわたしのものから去ってしまったことで、あなたにのぼせ上がったわたしの愛には傷ひとつ付かないでしょう。(二二頁)
	【自尊】 このことをわたしは周りの人たちに知ってほしいし、秘密にもしません。あなたのために、そして道徳や礼節と呼ばれているものすべてに逆らって、わたしがやったことすべてをやり遂げたことに恍惚としています。わたしの名譽、そしてわたしの信仰心は、この恋がはじまってしまった以上、いまやあなたをこの上なく愛することにしかないのです。(二二頁)
	【自尊】 わたしは、あなたの本心から自然と湧き上がってくるものしか望んでいません。黙って自分の内にとどめておける程度の愛の証など、何であれわたしはいりません。(二三頁)
【屈従】 無理して手紙など書きたくないとおっしゃるのなら、そんなあなたを許してあげることにわたしは喜びを見いだすでしょう。わたしはあなたにたいしては何でも許してしまいます。どこまでもとめどなく。(二三頁)	
【屈従】 フランスはスペインと講和を結んだ、と彼は言っていました。本当にそうなら、こちらへいらして、わたしをフランスへ連れていくことができるのではないのでしょうか。ですが、わたしはそんなことをしてもらうに値しません。したいようにしてください。(二三頁)	

	【応答の必要】 わたしの愛は、もはやあなたがわたしをどう扱うかに左右されたりしないのです。(二三頁)
【応答の必要】 しかし、もしかするとあなたはもう会えないかもしれないと思うと、途方もない悲しみに襲われもするのです。いったいどうして、あなたにもう二度と会えないなどということがありえるのでしょうか。あなたは永遠にわたしのもとから去ってしまったのですか。わたしは絶望しています……。あなたの哀れなマリアナは、もう何もできません。「……」わたしを憐れんでくださいませ。(二三頁)	

第三の手紙と同様、第四の手紙にも自分自身の情熱にこだわるマリアナの姿勢が表れている。冒頭から、「自分の胸のうちの思いをあなたに書いて伝えていると、自分がその思いにたいして最低なことをしていると感じてしまいます。あなたご自身も強い思いを自分の胸の内に持っていてわたしの思いを察してくださるのでしたら」と、思いの激しさを的確に言い表すことができないと彼女は嘆く。相手への嘆きで始まっていたこれまでの手紙とじつに対照的だ。「嘆かわしいのは、わたしよりもあなたです。といいますのも、フランスの愛人から与えられる薄っぺらな愉悦に浸っているあなたよりも、いま味わっているような苦しさを味わい尽くそうとしているわたしのほうがずっとよいからです。「……」そして、わたしはあなたよりも幸せなのです。あなたよりもはるかにたくさん、頭を悩ませているのですから」という言葉にも、彼女が自分の愛ゆえの苦しみを誇らしく思っていることが表れている。娯楽として愛を楽しむよりも、愛ゆえに辛酸を嘗めるほうが彼女にとってはいよいことなのである。

また、他の手紙と比べて第四の手紙によりはつきりと表れているのが、マリアナの愛の性的側面である。幸福だった

ときの回想としてイメージされるのは、シャミリーとの情事そのものだ。「もう以前のように、あなたがわたしの部屋で心と体を燃え立たせ、恍惚としている姿を見ることはないのでしょうか。ああ、ああ、いつもこの話になってしまいますね」。世俗的愛においては、応答されるとほぼ必然的に性的接触がともなう。マリアナにとっても、シャミリーとの愛には情事の記憶がともなっていたことがここで明らかになる。しかし最初に確認したように、リルケの〈所有なき愛〉からは性的要素が捨象されている。彼女が性的な応答を懐かしく思い返して求めつづけるかぎり、〈愛する女〉になるのは難しい。その後の「嫌です、あなたを忘れるくらいなら、もつとこの苦悩に耐えていくほうがよいのです」や、「わたしがいいないと生半可な快楽（Genüsse）しか得ることができない」というところまであなたを変えたのは、わたしの誇りです」という発言も、シャミリーとの性行為を思い返したあとに出てくるため、ここから彼女はいまだ幸福な情事の記憶を手放していないことが読みとれる。

リルケが『ポルトガル文』について語るさいに、マリアナの愛のたどり着いた境地としてよく引いてくる一節が、この第四の手紙にはある。それは、「わたしの愛は、もはやあなたがわたしをどう扱うかに左右されたりしないのです」というものだ。この言葉自体は【応答の不要】に分類されるべきものであるが、それが現われた文脈のなかで考えてみると、リルケが意図したものは異なるマリアナの姿が浮かびあがる。「フランスはスペインと講和を結んだ、と彼は言っていました。本当にそうなら、こちらへいらして、わたしをフランスへ連れていくことができるのではないでしょう。ですが、わたしはそんなことをしてもらうに値しません。したいようにしてください」という【屈従】の言葉につづいて、あの【応答の不要】が高らかに告げられる。自分はフランスに連れていってもらえるに値しない人間だと卑下し、投げやりになったような言いかたをしたあとで、その投げやりさを半ば引き継ぎながらも、マリアナは〈愛する女〉の位相へと発言を高めあげる。第二の手紙において見られた〈愛する女〉への飛躍がここにも表れている。しかし

この変化はわずかな間しか続かず、その後彼女はまたシャミリーからの応答を求める〈愛される女〉に逆戻りしている。リルケはこの発言をマリアナの愛の最終的な到達点と見なしていたが、実際に『ポルトガル文』を確認してみると、マリアナの変化は〈愛される女〉から〈愛する女〉への単線的な経過をたどっていったのではなく、たえず行ったり来たりを繰り返して揺れ動きながらの変化であったことがわかる。

第五の手紙

表五

〈愛される女〉	〈愛する女〉
	【相手からの解放】 あなたはもうわたしのことを愛していない、だからわたしももうあなたのことを愛してはいけなと、ついにこのわたしに認めさせたのです。(二四頁)
	【相手からの解放】 数日前からわたしは、とても大切にしていたあなたの愛の証を、焼いてずたずたにしてしまえそうな気がしています。(二四頁)
	【相手からの解放】 わたしは改めて自分の考えをすべて見直さなければなりません。その一つ一つから自分を解放するために。それは、あなたからいつか完全に自由になることができればと祈っていたときのことでした。(二五頁)

【相手への依存】 いかなる場合でも、恩知らずなあなたのことを愛しつづけるほうが、あなたを永遠に諦めてしまうことよりも、わたしにとってはましな苦痛だったでしょう。(二五頁)	
【応答の必要】 ひどく恩知らずなあなた——そしてばかなわたし、いまだに悲嘆に暮れているなんて。(二六頁)	【相手からの解放】 わたしはあなたにそれほど執着しているわけではなく、むしろ自分自身の情熱に執着しているのだとも気づきました。(二五頁)
	【応答の不要】 わたしの恋心を、どうしてそっとしておいてくださらないのですか。お手紙なんて、書いてくださらなくてよかったのですよ。事情を説明してもらいたいなんて思ったことはありませんでした。(二六頁)
	【自尊】 ぜひとも知っておいてください、わたしはもうわかっています。あなたがわたしの恋心に値しない方である、と。(二六頁)
	【応答の不要】 もうわたしに手紙を書いてこないでください。そうすることで、わたしが完全にあなたのことを忘れる手助けをしてください。(二六頁)
	【応答の不要】 わたしがすることに、だからもう口出しをしないでください。「……」わたしがいま心穏やかな状態を作りあげようとしているのを邪魔しないでください。(二六頁以下)

	【自尊】 ですが、逆にいえば、どういう女を恋人にすればいいかすこし冷静に考えてみるなら、他のどんな女よりもまさに修道女を選ぶべきだとわたしには思われるのです。彼女たちがひたすら自分の情熱のことはかり考えるのを妨げるものではありません。外の女なら、たえず幾千もの娯楽に移りしたり熱中しますが、修道女たちはそうしたものに気をそらされることがありません。(二八頁)
	【応答の不要】 ですがわたしは、しかるべき理由をあげて、あなたはわたしを愛さなければならぬと証明したいわけではありません。(二八頁以下)
【屈従】 自分をもっと美しかったら、あなたにもっとふさわしい女だったらと思つて気が気ではありませんでした。(二九頁)	
【応答の必要】 あなたがポルトガルから去つた後も愛の証を届けてくれたなら、変装するなど、ここから出るためにあらゆる手を尽くして、あなたのもとを訪ねたでしょう。(二九頁)	【応答の不要】 わたしが気をしっかりと持っているのがあなたの気に入るかどうか、あなたがわたしに満足していらっしゃるか、そんなこと知りたくはありません。わたしはもうあなたにお願いしました、もう手紙を書いてこないで、と。もう一度、切にお願いしておきます。(二九頁以下)

【応答の必要】 愛してもらおうと思ったなら、もっと手練手管を用いなければなりません。恋心に火をつける方法を巧みに見つけ出さねばなりません。ただ愛するだけでは、愛されることはできないのです。(三二頁)	
【自尊】 なんて卑劣なのでしょう。あとで罰を受ける心配なしにわたしを騙すのは、そんなに簡単なことだとあなたは思い込んでいるのですか。いつかあなたがこの国にもう一度足を踏み入れることがあれば、わたしがあなたを家族の復讐の手にゆだねると確信なさって結構です。(三二頁)	
【相手への依存】 わたしに美点があるのも、わたしがきれいなのも、あなたのおかげだと思われました。それを見いだし、意識させてくれたのはあなたなのです。(三三頁)	
【相手からの解放】 ですが、わたしはついに、あなたにかけられた魔法を解いてしまいました。(三三頁)	【自尊】 わたしは長いあいだ我を忘れて、偶像崇拜に生きてきました。それを思うと、おどましくて体が震えてしまいます。わたしは良心の呵責に、耐えがたいほどきびしく苛まれています。あなたがわたしに犯させた犯罪が恥ずべきものであると身にしみて感じますし、その罪の恐ろしさをすべて覆い隠してくれたわたしの情熱は、残念ながらどこかへ行ってしまう。(三二頁)

【相手への依存】 わかっています、今もあなたの不実を責めてばかりいることは。 (三二頁)	【応答の不要】 ですが、ご存じでしょう、わたしは心穏やかな境地に達するのだと自分に約束しました。そして必ずそうなります。「……」わたしはもうあなたに何も望みません。(三二頁以下)
---	--

第四の手紙を出したあと、マリアナのもとにシャミリーから手紙が届く。待ちこがれていたはずの手紙だったが、彼女はそれを読んで激昂した。「わたしの恋心を、どうしてそっとしておいてくださらないのですか。お手紙なんて、書いてくださらなくてよかったのですよ」と彼女は訴える。一見するとこの発言は、手紙をもらえないことを嘆いていたこれまでの手紙と矛盾しているように思われる。しかし彼女が今回受けとった手紙は、これまでの情熱的な手紙への返答としてはあまりにもつまらない凡庸なものだったのであろう。そんな手紙を読んで彼女は、自分の情熱が求めていることはなんだったのか初めて気づくことになる。「いかなる場合でも、恩知らずなあなたのことを愛しつづけるほうが、あなたを永遠に諦めてしまうことよりも、わたしにとつてはましな苦痛だったでしょう」と【相手への依存】の言葉を述べた直後、彼女は悟る——「わたしはあなたにそれほど執着しているわけではなく、むしろ自分自身の情熱に執着しているのだと」。ここで情熱の向かう先たる相手は立ち消え、情熱そのものが目的となる。皮肉ではあるが、シャミリーからの応答があつてはじめて、マリアナは相手の応答、そして相手の存在などもはや必要ないことを最終的に自覚することができたのである。彼女はもうわかつて、「あなたがわたしの恋心に値しない方である、と」。彼女の愛はもはやシャミリーには応答することができないほど大きなものになっていた。

かといって、彼女はリルケの言うような〈愛する女〉になれたわけではない。気丈な言葉の合間には、いまだに弱気な感情が吐露される。「ひどく恩知らずなあなた——そしてばかなわたし、いまだに悲嘆に暮れているなんて」、「わかつています、今もあなたの不実を責めてばかりいることは」。彼女はシャミリーへの想いから自由になろうとしているが、その意志はあるもののまだ感情がついてきていないさまがありありと見てとれる。表五では〈愛する女〉としての発言が目立つが、いまだこうした〈愛される女〉の嘆きが見られるのを看過することはできないだろう。興味深いのは、「あなたがポルトガルから去った後も愛の証を届けてくれたなら、変装するなど、ここから出るためにあらゆる手を尽くして、あなたのもとを訪ねたでしょう」という発言である。シャミリーがマリアナの手紙に真心を尽くして応答していれば、マリアナはここまでではなく情熱を募らせていただろうか。そんなことはないだろう。〈愛する女〉へと近づくためには、彼女の愛は応えられてはいけなかった。愛が応えられたら、そこで愛の成長は止まってしまう。リルケはマリアナの愛についてこう述べている、「慌ただしくいい加減に始められたこの愛がかくも完全なものになるには、孤独が必要だったのだ」[SW VI, 100ff.]。しかしマリアナはいまだに、シャミリーが自分のことを愛してくれていたならと考えるのをやめられない。いまの孤独の状態それ自体に、はたして彼女はどれほどの価値を見出しているのだろうか。

いま一度問おう、マリアナは〈愛する女〉になれたのか。ここで注目したいのは、第三、第四の手紙で出てきた【自尊】の項目である。そこで彼女は情熱を根拠に自分を誇っていたが、第五の手紙においては「わたしは長いあいだ我を忘れて、偶像崇拜に生きてきました。それを思うと、おぞましくて体が震えてしまいます」と、情熱を否定して理性的な立場から語っている。「わたしの情熱は、残念ながらどこかへ行ってしまうました」という告白にもあるように、マリアナは情熱それ自体を捨ててしまった（あるいは今後捨てよう決心している）のである。情熱の対象をなくすのではなく、情熱それ自体をなくすことによってこれから平穩に生きていこうとするマリアナは、〈愛する女〉といえるのだろうか。

これでは、愛した男に去られて恋なんてもうこりこりと嘆く女と、いったいどこがちがうのか。第一の手紙から第四の手紙にかけて見られた屈従の姿勢は鳴りを潜め、毅然とした態度をとってはいるものの、〈愛する女〉へと彼女の愛の位相が変わったわけではない。情熱を捨てて到達する「心穏やかな境地」は、もはや愛さなくなった人間に与えられるものであつて、〈愛する女〉が昇りつめる高みとはまったく別のものであろう。

ここまで、五通の手紙を順を追つて分析してきた。第一の手紙と第二の手紙においては、マリアナは**【屈従】**する〈愛される女〉であつた。しかし第三の手紙と第四の手紙においては、相手にたいして以上に自分の情熱や苦しみ自体に執着する彼女の姿勢が強く表れてきている。第一の手紙から第四の手紙にかけて注目すべきは、マリアナが〈愛される女〉から〈愛する女〉へと移行するときに見られる飛躍である。『ポルトガル文』では、マリアナは〈愛される女〉と〈愛する女〉のあいだを目まぐるしく行き来する。〈愛される女〉としての言葉を述べたかと思えば、そこから急に〈愛する女〉へと変貌する。また〈愛する女〉から〈愛される女〉へと戻つてしまふこともあるが、そこにはまだ〈愛する女〉の名残が見られることもある。リルケがマリアナに見いだした、〈愛される女〉から〈愛する女〉への変身は、けつして単線的な移行ではなく、こうした揺れ動きのなかにこそあつた。だが第五の手紙においては、マリアナはなお未練を残しながらもシャミリーを愛するのをやめると宣言するが、この宣言のもとマリアナが目指す境地は、〈愛する女〉ともはや関係のないものになっている。ひたむきに愛することをやめ、激しい感情に心乱されることなく、家族や社会秩序に反目せず穏やかに暮らしていきたいと願うマリアナは、もはや現実を超越する〈愛する女〉の苛烈さを望んでいない。マリアナの到達した境地としてリルケがよく語る「わたしの愛は、もはやあなたがわたしをどう扱うかに左右されたりしないのです」という言葉は、第四の手紙の末尾に位置している。第五の手紙をどう解釈しているかについてリル

ケは直接語っていないものの、〈愛する女〉マリアナの最終的な到達点を第五の手紙ではなく第四の手紙に置いていることを見過ごしてはならないだろう。

さて、『ポルトガル文』の分析によって、リルケの〈愛する女〉像の核心に迫る準備が整った。リルケが〈愛する女〉として見いだしたマリアナは、たしかにその片鱗を手紙のなかで見せてはいるが、しかし全体としてみれば〈愛される女〉の印象が強い。そして一連の書簡の最後を飾る第五の手紙で情熱を捨ててることを選んだのも、やはり〈愛する女〉にはほど遠い。それでは、リルケが彼女の手紙から〈愛する女〉としての要素を救いだし、それを『マルテの手記』で世俗的な愛を超えたものとして結晶化したのはいったいなぜだろうか——この問いにたいする答えは別稿に譲ることとしたい。⁽⁶⁾

〈註〉

(1) Die Briefe der Marianna Alcoforado. Übertragen von Rainer Maria Rilke. In: Sämtliche Werke. Bd. 7. Hsg. vom Rilke-Archiv, in Verbindung mit Hella Sieber-Rilke, besorgt durch Walter Simon, Karin Wais und Ernst Zimm. Frankfurt a. M. und Leipzig 1997.

(2) この手紙はマリアナ自身によって書かれたものか、あるいは創作かという問題は、出版された十七世紀当時から議論になっていた。たとえばルソーは『ダランベール氏への手紙』で、こうした芸術を生み出すことができるのは男性だけだという考えからこれを男性の手になるものと断じている。しかし十九世紀になってから、マリアナ・アルコフォードという女性が実際にポルトガルの修道院にいたことが明らかになり、この手紙は真作だと見なされるようになった。リルケ自身、マリアナがこの手紙を書いたと信じて疑わなかった。しかし一九二〇年代になると、真作説は覆さ

れる。これまで翻訳者と目されていたギュイラッグこそがこの書簡の作者だったことをさまざまな史料から明らかにした画期的論文が発表されたのである。以後、その論文につづいてギュイラッグの他の作品との関連などが分析され、創作説はますます地盤を固めてゆき、現在では通説となっている。『ポルトガル文』の作者をめぐるこの論争は以下の論文に詳しい。寺迫紀子「Lettres portugaisesにおける《désordre》再考——二つの cristallisation——」、九州大学文学部『文学研究』第八十二輯、一九八五年。

- (3) 某嬢宛。Rilke, Rainer Maria: *Gesammelte Briefe*. Bd. 3. Hrsg. von Ruth Sieber-Rilke und Carl Sieber. Leipzig 1937. Reprinted by the Rinsen Book Co. Kyoto 1977, S. 227.
- (4) リルケの作品からの引用は、以下の全集よりおこなう。Rilke, Rainer Maria: *Sämtliche Werke*. 6 Bde. Hrsg. vom Rilke-Archiv, in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilke, besorgt durch Ernst Zimm. 1955-1966. 7冊からの引用は「SW VI, 941」の形式で示し本文中に組み込んだ。この例であれば、第六卷九四一頁からの引用を意味する。
- (5) 某嬢宛。Rilke: *Gesammelte Briefe*. Bd. 3, S. 228.
- (6) その答えの一つとして、白坂彩乃「R・M・リルケの〈所有なき愛〉について——『マルテの手記』を中心に」、『京都大学人間・環境学研究科修士論文』二〇二〇年。